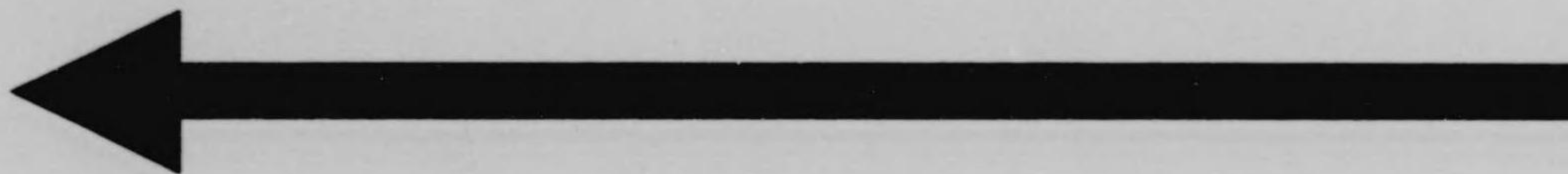
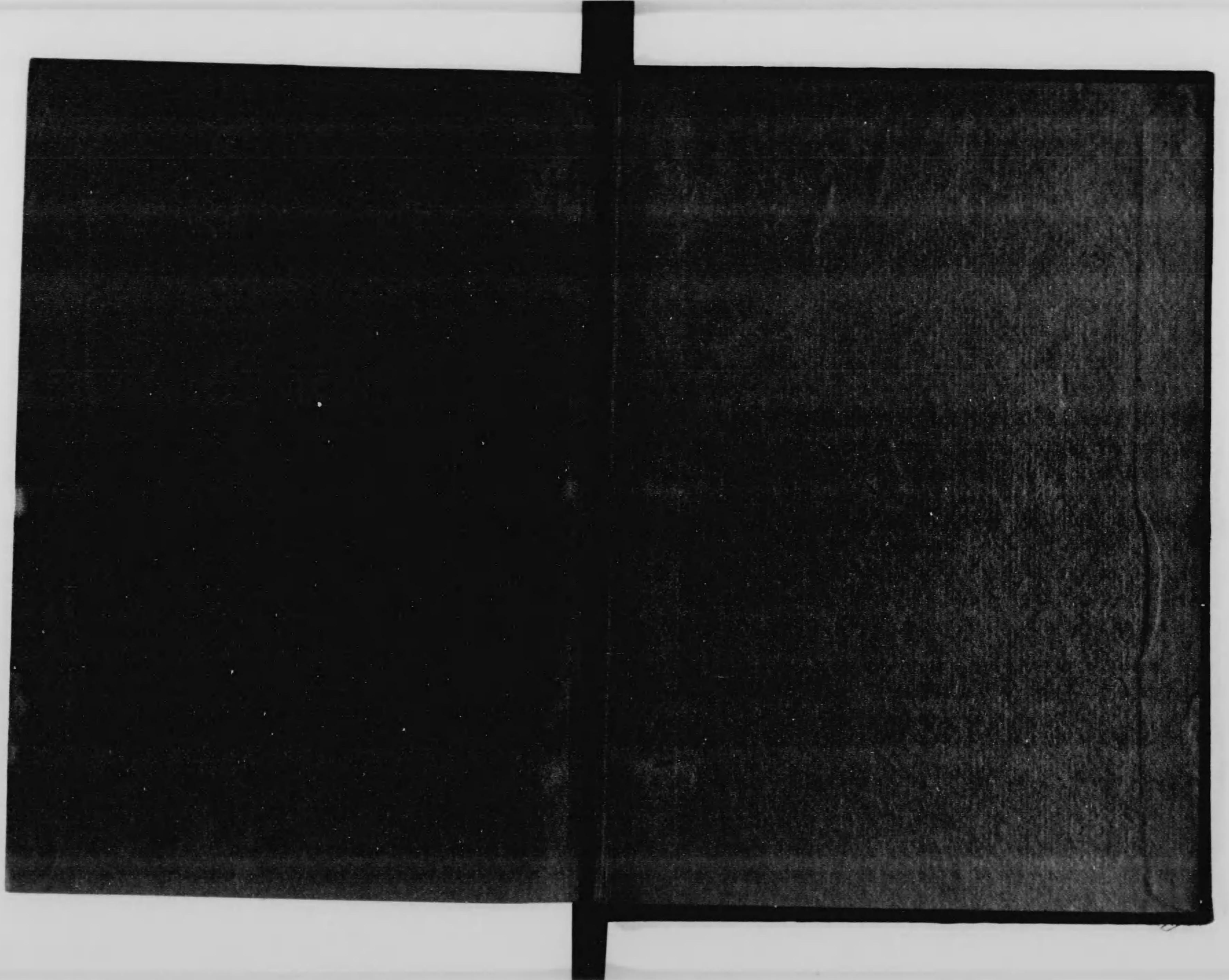


372
41



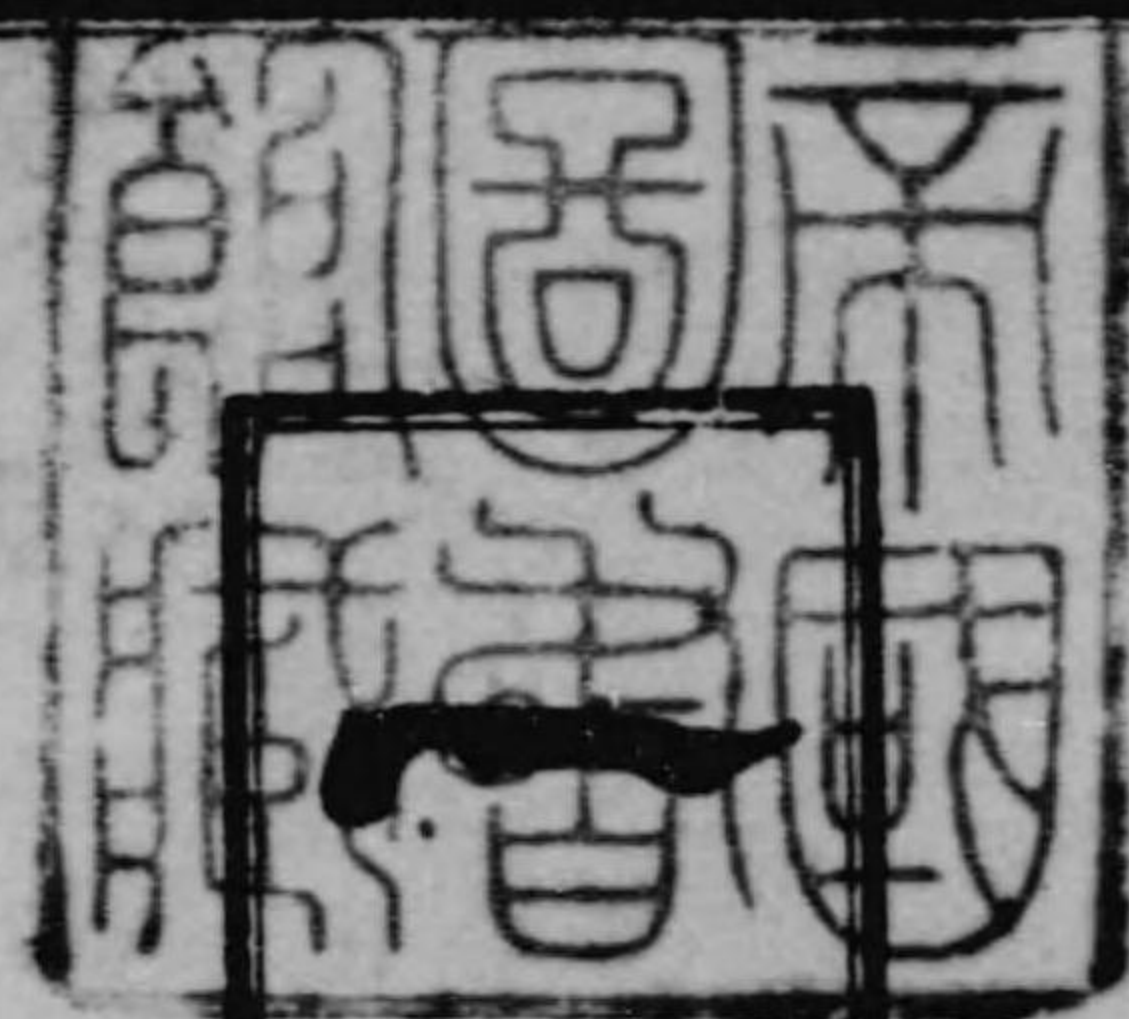
始





一元書齋

372-41



元書齋

大正
7. 1. 7
内交



元書識



緒言

予は多年研鑽の結果、書道に於ける筆法、結構、連綿に關する總ての要件を一の一畫に歸納するを得たり。依て聊斯道の學習に便あるを念ひ、爾來此法を説きて各地を漫遊すること數年、然るに到る所名士の賛同を得、幸に今日あるを得たり。今此説の世に用ひらるゝ偶然あらざるを知り、其要點を抜萃して此書を著せり。讀者幸に批正に吝ある勿れ

大正五年二月

著者識

目次

一、筆法 (六頁)

二、筆法 (六頁)

三、筆法 (六頁)

四、筆法 (六頁)

五、筆法 (六頁)

六、筆法 (六頁)

七、筆法 (六頁)

八、筆法 (六頁)

九、筆法 (六頁)

十、筆法 (六頁)

十一、筆法 (六頁)

十二、筆法 (六頁)

十三、筆法 (六頁)

十四、筆法 (六頁)

十五、筆法 (六頁)

十六、筆法 (六頁)

十七、筆法 (六頁)

十八、筆法 (六頁)

十九、筆法 (六頁)

二十、筆法 (六頁)

一 筆 法



書道に於ける點畫の書き方を筆法といふ。筆法に於て注意すべき主なる條件は、畫の陰陽、畫の表裏、及び連筆の緩急等あり。然るに是等の條件は、一の一畫に就き總て研究し得るに因り、左に一を基礎として、總ての點畫を説明す。勿論、和様に於ける總ての點畫を説明す。字法として既に世に行はれつゝあり。然りと雖も、從來は一を春夏秋冬の四部に分ちて、各部に於ける巾の廣狹を示すに止まれり。故に是のみにて總ての點



畫の表裏
 上に示したる如く一の上
 端は筆鋒の尖端を通過せ
 しめ、一の下端は鋒の腰部
 を通過せしめたるを名つ
 けて、前者は表、後者は裏と
 稱す

點 原



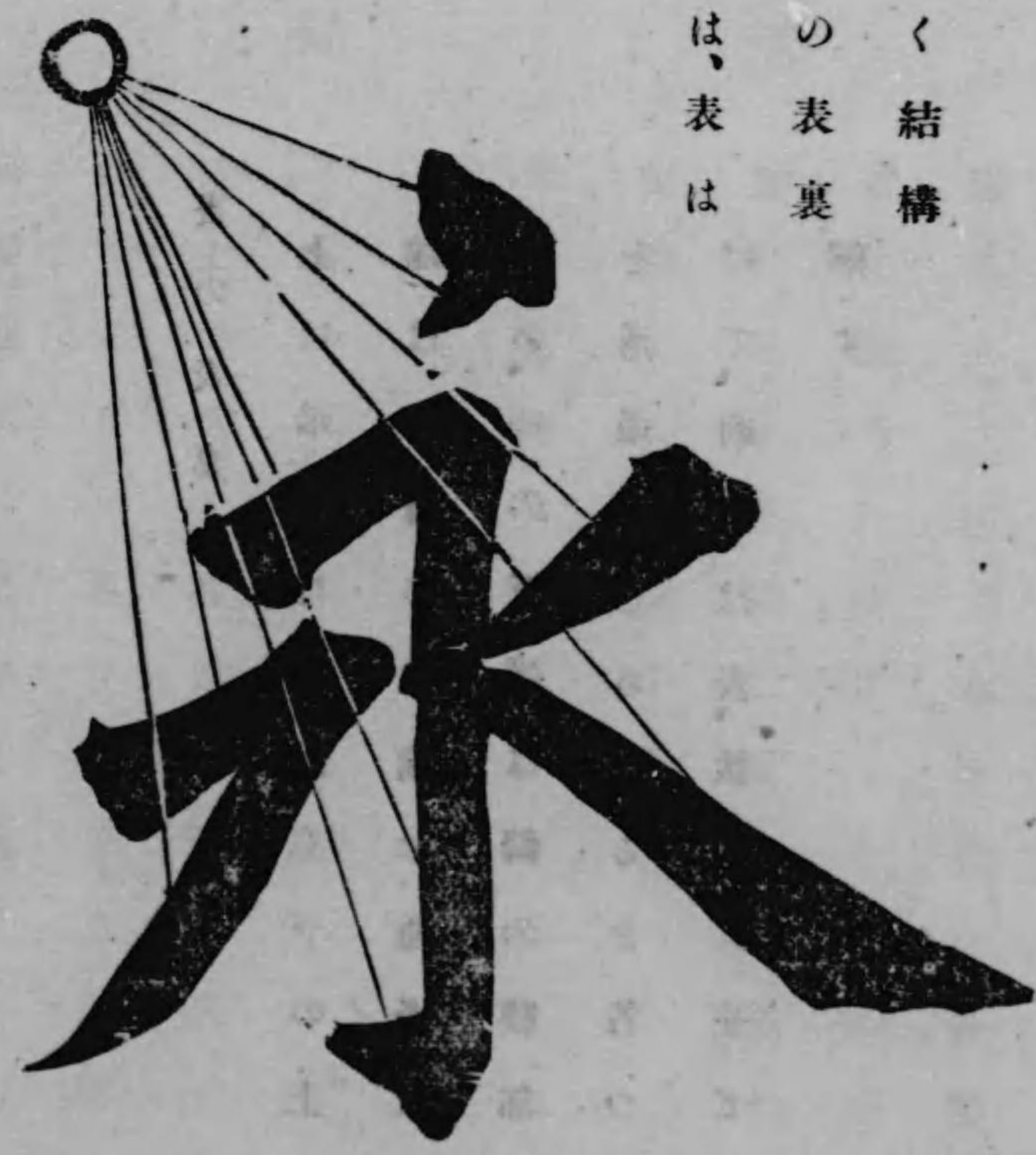
陽

陰

畫の書き方を説明するは困
 難あり。因て本書には各點
 畫の説明に使あらしめんか
 爲に、一を陰陽二個の原點に
 分解して説明す可し
 一の陰陽上に示したる如
 く一は二個の原點の連続よ
 り成れる畫にして左方の點
 は上に折り、右方の點は下
 折りたるを名つけて、前者は
 陽點、後者は陰點と稱す

結構諸畫の表裏

下に示したる如く結構
上に於ける諸畫の表裏
を総合するとき、表は
總て左上の一
點に向ふこと
恰も草木の陽
か太陽に向へ
ると同一あり

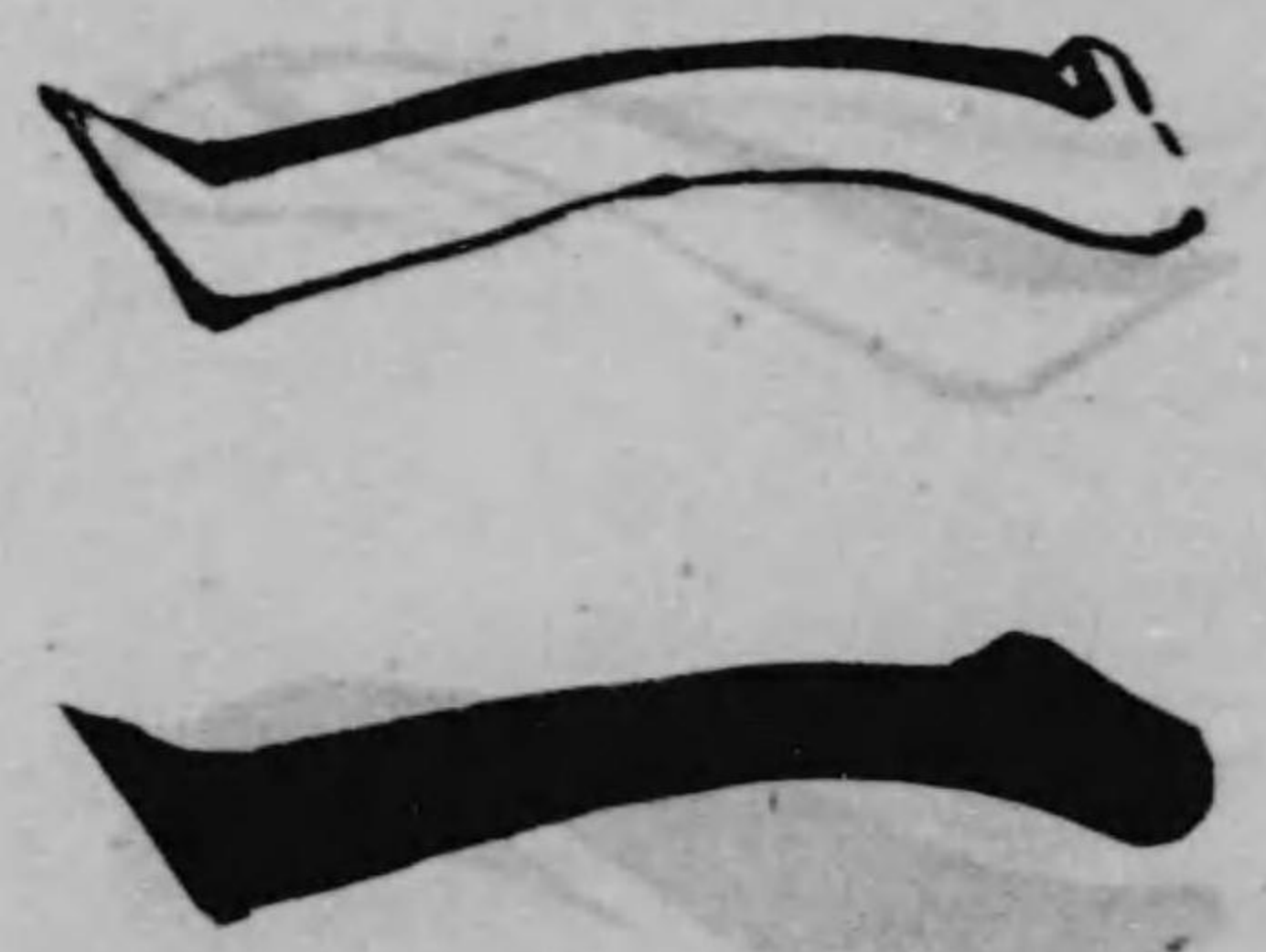


運筆の緩急

運筆の緩急は力の虚實に
伴ふものあり
故に一は陰陽共、點の中央
は最も力の充實を要す可
きに因り、該所に到らは筆
を遅滞せしめ、左右に向は
、漸次其度を速かからし
むるを要す

陽

陰

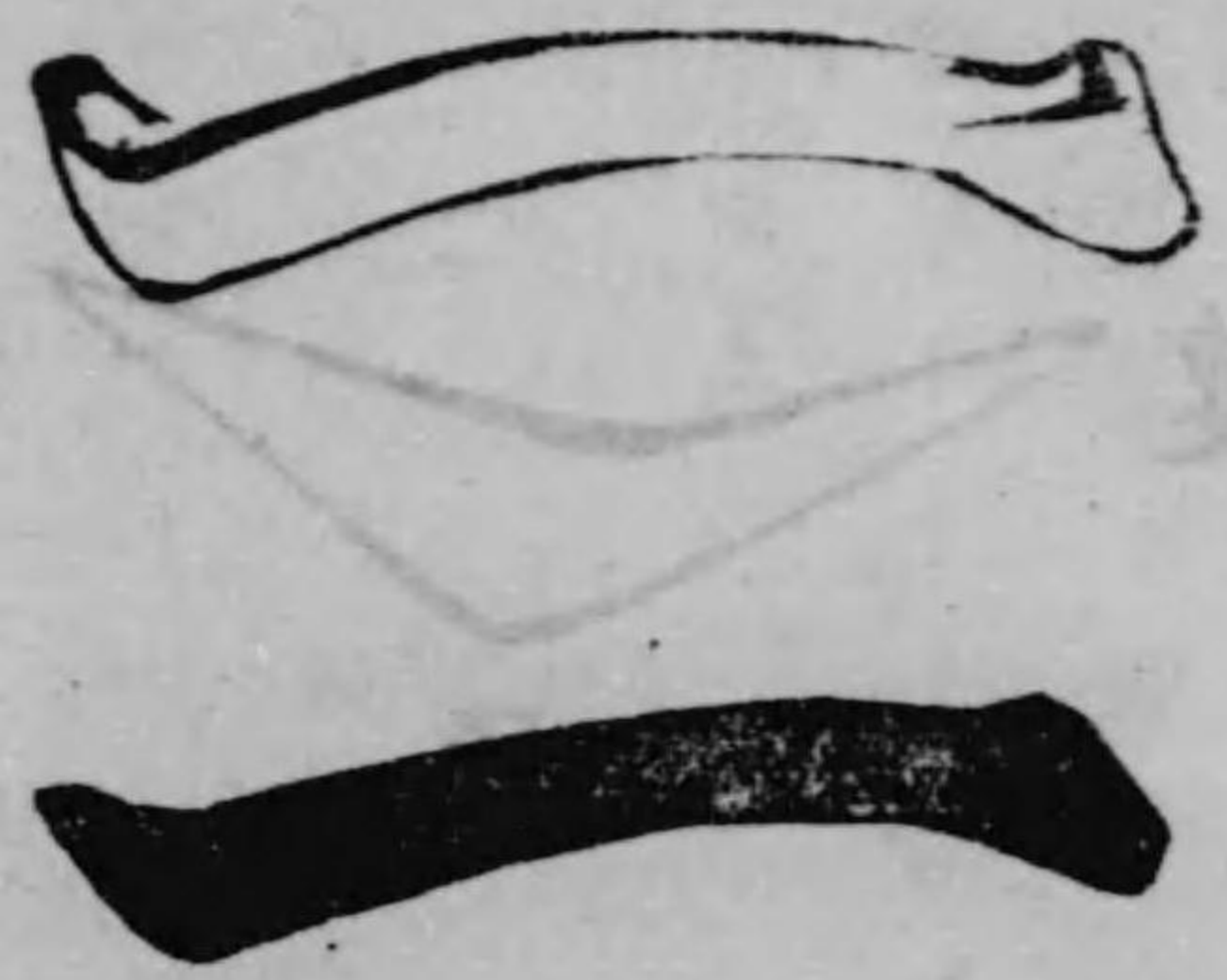


露鋒の一

上に示したる如く露鋒の
 一は陽點は原點其儘の形
 を書き顯はし、陰點は中央
 に到らは鋒の尖端を稍上
 に押し上ぐる筆意にて左
 方に折り返すあり

陽

陰



藏鋒の一

上に示したる如く藏鋒の
 一は陽點は右方の空間よ
 り入れたる筆を右下に曳
 き下げ、更に右に向け折り
 返すあり。陰點は左方よ
 り運へる筆を、點の中央に
 於て儘に上に押し上げ、次
 に右下に曳き下げ、更に左
 方に折り返すあり

陰 陽



隸書の一

上に示したる如く隸書の
一は楷書の一を裏返せし
形あり
故に楷書の一の反対に陰
点を左、陽点を右に向け書
き顯はすあり

陽 陰



草書の一

上に示したる如く草書の
一は陽点は行書と同じく
原点其儘の形を書き顯は
し、陰点は左方より運へる
筆を、点の中央より左下に
刎ね出すあり

樹 樹

あり。次にまは内部あるに
 因り何れの横畫にも兩端
 に外壁を要せず、故に平勒
 を用ふるあり。次に寸は右
 側あるに因り横畫の左端
 には外壁を要せず、故に鱗
 勒を用ふるあり
 第二に示せる如く何れの
 横畫にも悉く外壁を作る
 ときは各部孤立の形さか
 りて融和せず

勒



仰勒、平勒、鱗勒

上に示したる如く一を三
 分して左方の部を仰勒、
 中央の部を平勒、右方の
 部を鱗勒と名づけ、仰勒
 は扁、鱗勒は旁、平勒は
 文字の内部に用ふ
 上に示したる第一、樹の木
 扁は文字の左側あるに因
 り横畫の右端には外壁を
 要せず、故に仰勒を用ふる



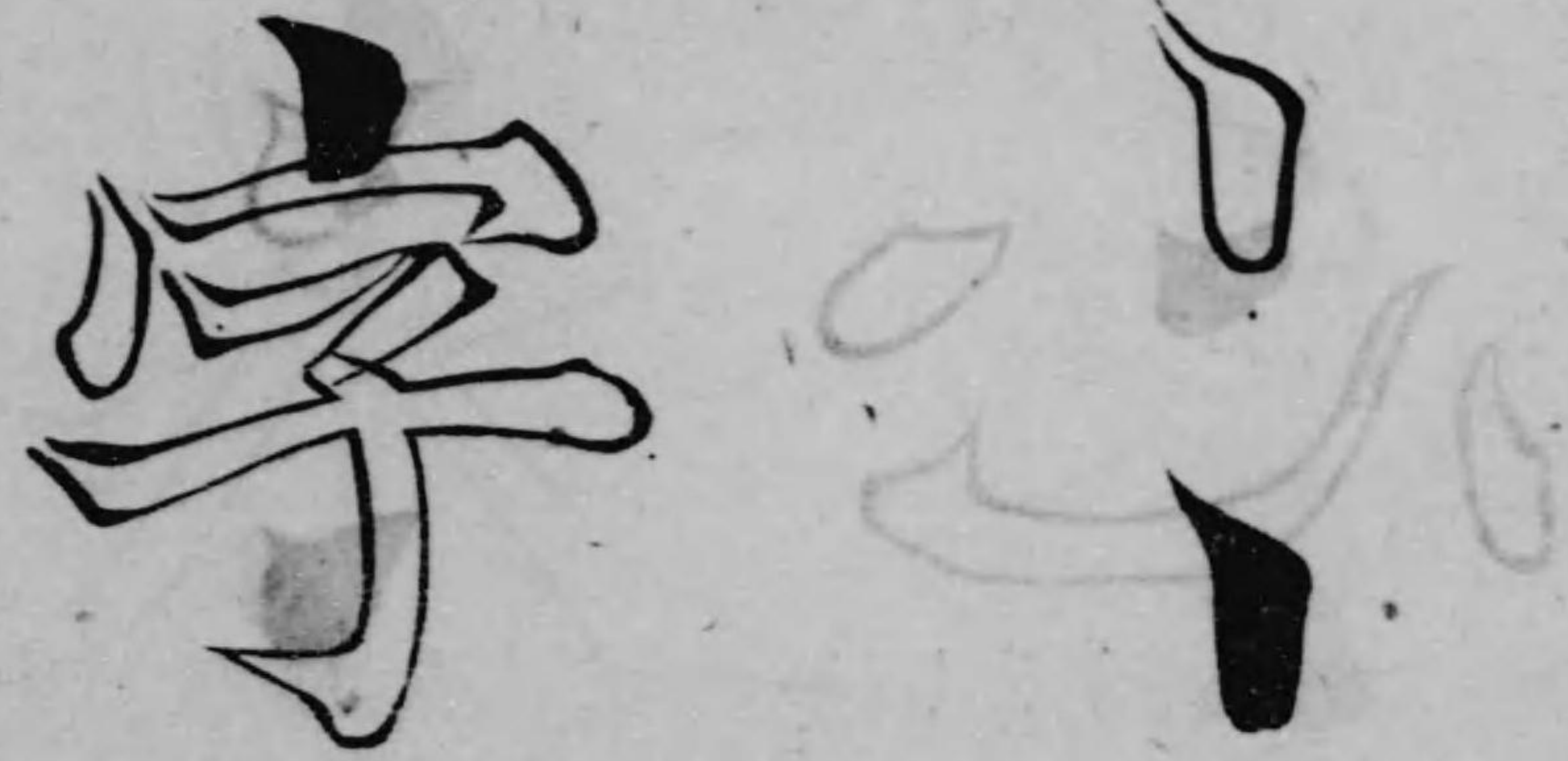
梅 球

上に示したる如く、梅球は側點を裏返したる形あり。故に運筆の方法は一を、表を左、裏を右に爲し斜に書き顯はすあり。此點は上に示せる心字第三畫の如く文字の中心若しくは左側に用ふる斜點あり。

側 點

上に示したる如く側點は一を收縮せしめたる形あるか故に、運筆の方法は、一と全く同一あり。此點は上に示せる永字第一畫の如く文字の中心に用ふる斜點あり。

龜頭點



龜頭點

龜頭點は一の陽點を縦に書き顯はしたる形あるか故に左方より入れたる筆を下方に曳き下すあり此點は上に示せるウ冠第一畫の如く文字の上部に用ふる縦點あり

杏仁點



杏仁點

杏仁點は一の陰點を裏返し斜に書き顯はしたる形あり。故に運筆の方法は一の陰點に同し此點は上に示せる心字第一畫の如く、文字の左側に用ふる斜點あり

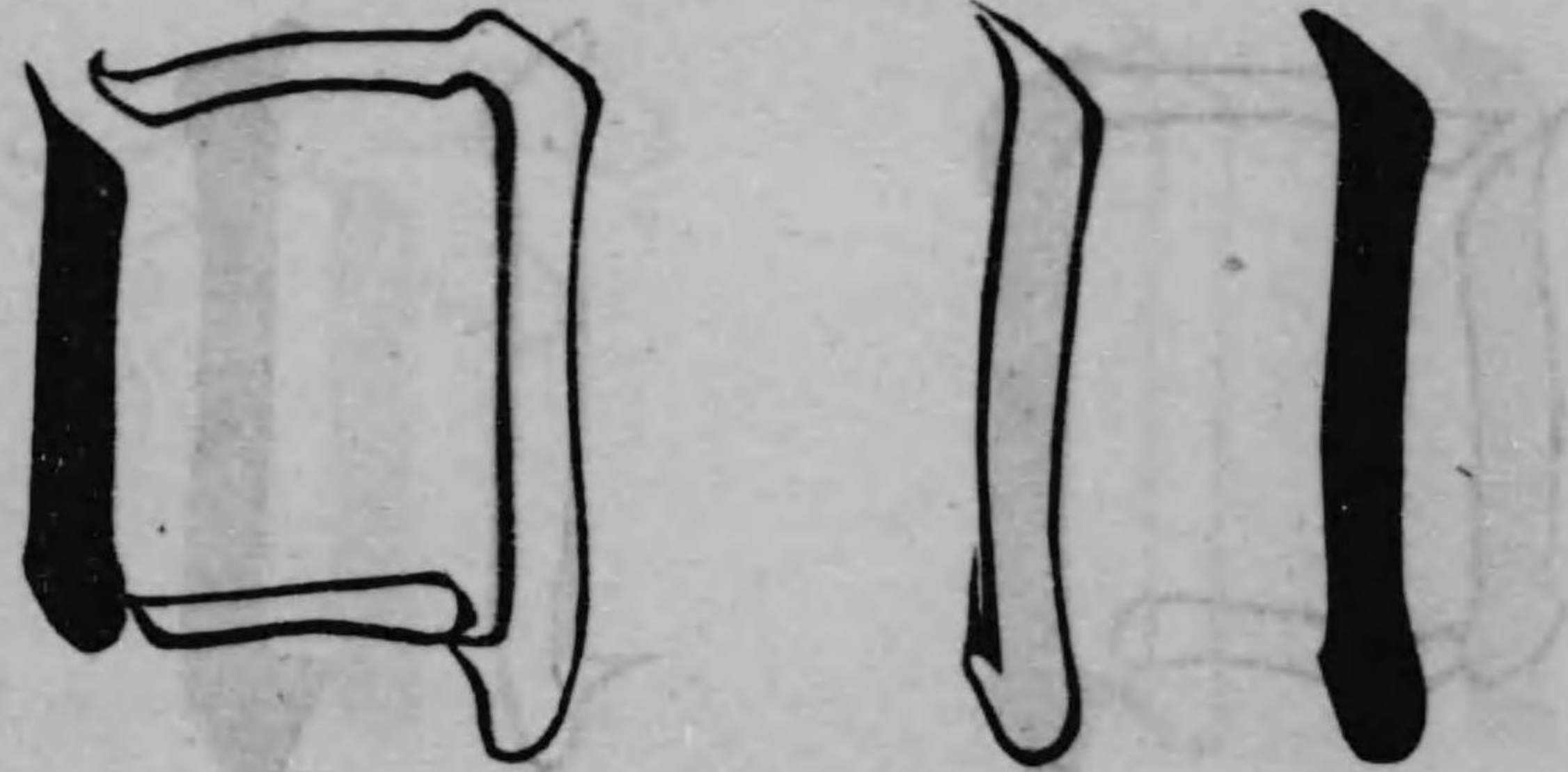
梅 核 點



梅核點

上に示したる如く、梅核點は一の陰點を斜に書き顯はしたる形あり。故に運筆の方法は杏仁の裏あり。此點は上に示せる心字第四畫の如く文字の右側に用ふる斜點あり。

鐵 柱



鐵柱

上に示したる如く鐵柱は一を、陽を上、陰を下にかし縦に書き顯はしたる形あり。故に運筆の方法は一と異なることあり。此畫は上に示せる國構第一畫の如く文字の左側に用ふる縦畫あり。



垂 露 上 に 示 した る 如 く 垂
 露 は 一 を 陽 を 上 陰 を 下 に
 爲 し 縦 に 書 き 顯 は した る
 形 ち れ とも 其 形 直 く して
 鐵 柱 の 如 く 彎 曲 せ ず
 此 畫 は 上 に 示 せ る 下 字 第
 二 畫 の 如 く 文 字 の 中 心 に
 用 ふ る 縦 畫 あり



弩 上 に 示 した る 如 く 弩 は 一
 を 陰 を 上 陽 を 下 に 爲 し 縦
 に 書 き 顯 は した る 畫 ち れ
 とも 縦 畫 の 上 端 を 陰 の 形
 に 書 き 顯 は さん 欲 す る
 と き は 筆 鋒 の 亂 る こと
 ある に 因 り 楷 書 に 於 て は
 上 端 を も 陽 の 形 と 爲 す ち
 り 此 畫 は 文 字 の 右 側 に
 用 ふ る 縦 畫 あり

針 懸

串 川

懸 針

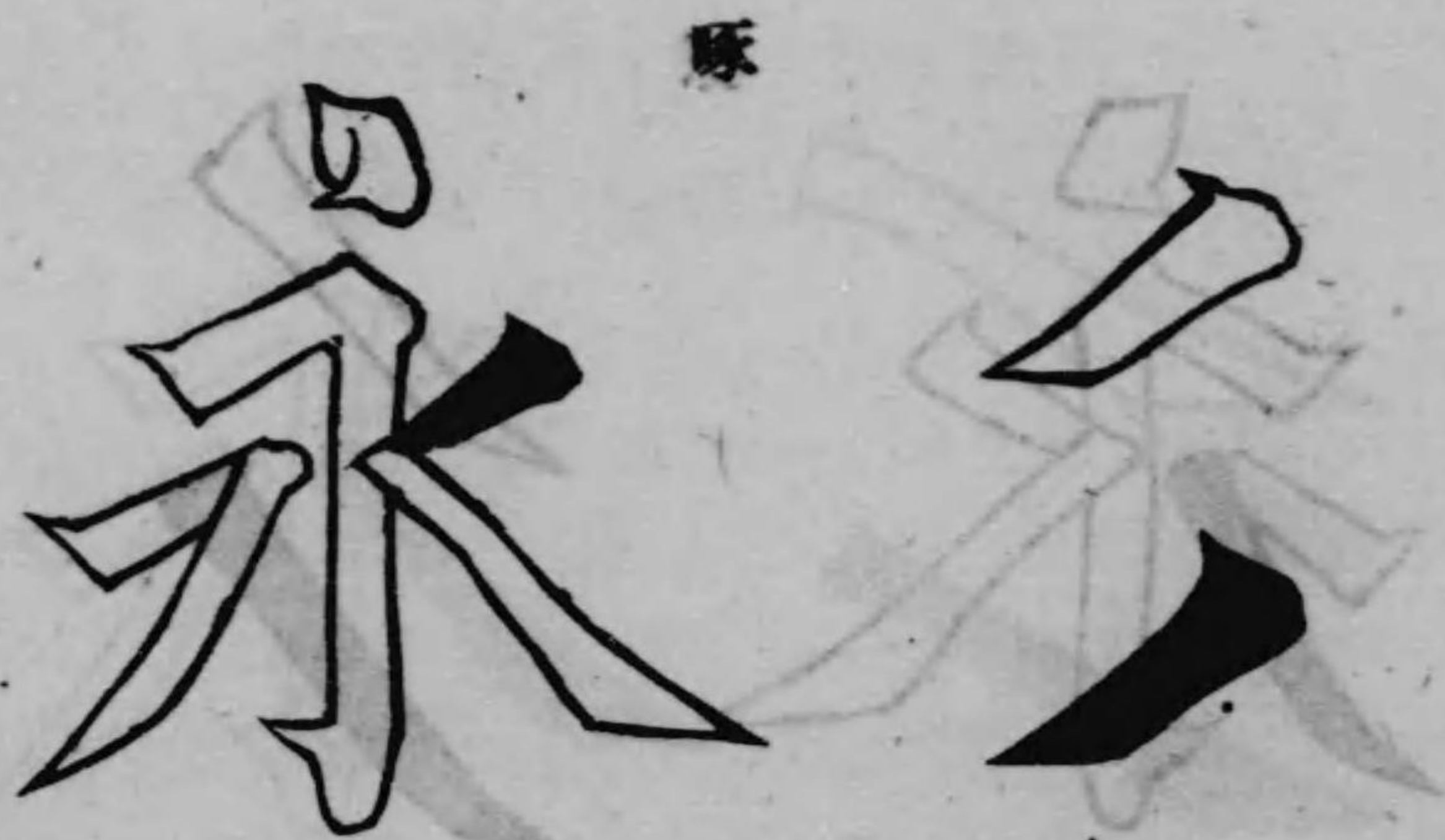
上に示したる如く懸針は、
 一を、陰を上、陽を下に爲し、
 縦に書き頭はしたる形を
 れども、縦畫の上端を、陰の
 形に書くは不可能なるに
 因り、上端をも陽の形に書
 くあり
 此畫は上に示せる串字第
 五畫の如く文字の中心に
 用ふる縦畫あり

月 新

月 川

新月

上に示したる如く新月は
 既に説明せし鐵柱の陰點
 を下方に刎ね出したる畫
 あり。故に鐵柱と同様に
 縦に書くを要す。斜に書
 くは宜しからず
 此畫は上に示せる月字第
 一畫の如く、文字の左側に
 用ふる縦畫あり



啄

上ノに示したる如く啄は一
 の陰點を斜に書き顯はし
 たる形あり。故に運筆の
 方は一の陰に同し
 此畫は上に示せる永字第
 七畫の如く文字の右側に
 用ふる斜畫あり。



策

上に示したる如く策は一
 の陽點を斜に書き顯はし
 たる形あり。故に運筆の
 方法は一の陽
 に同じ
 此畫は上に示せる永字第
 五畫の如く、文字の左側に
 用ふる斜畫あり。



磔

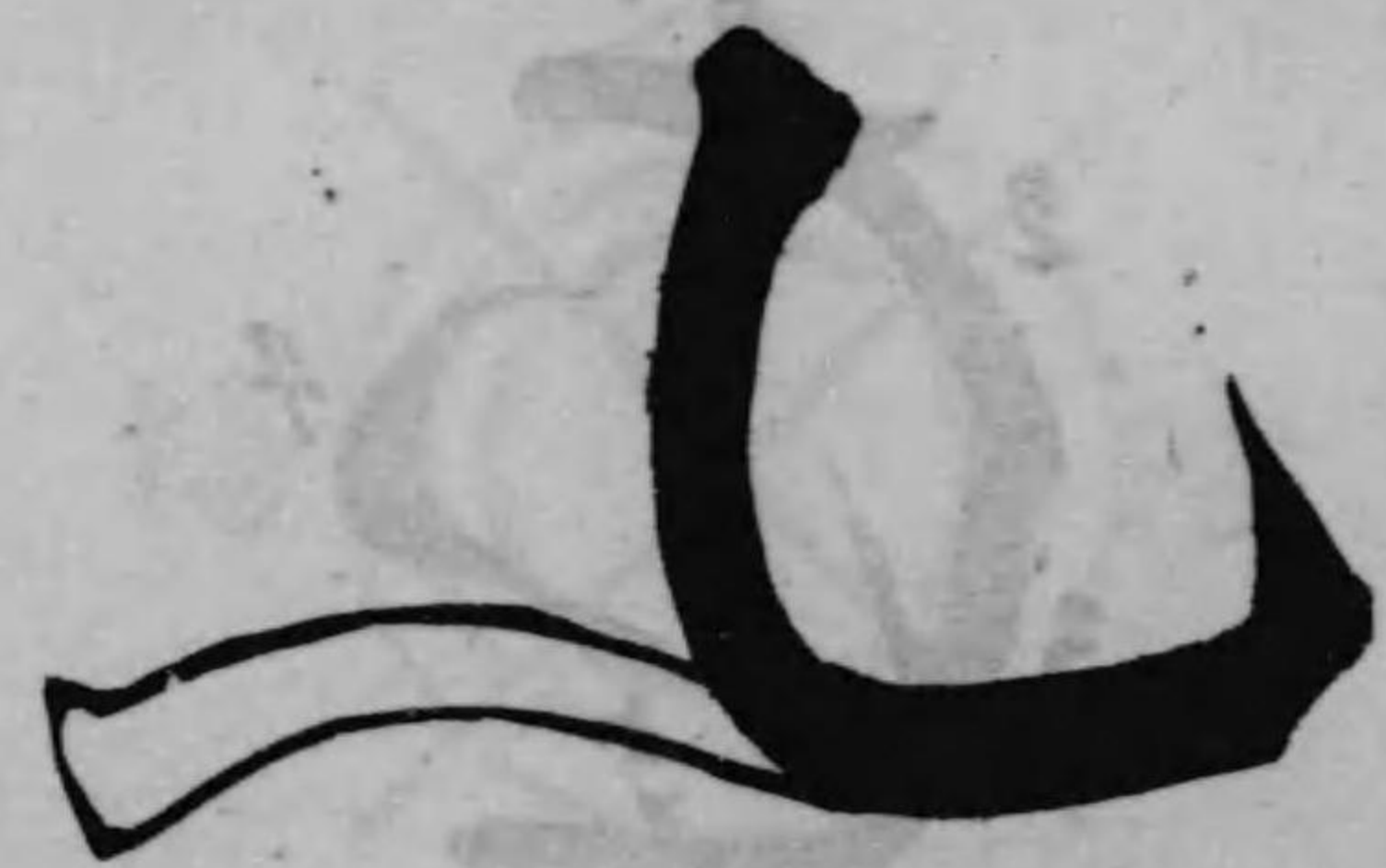
上に示したる如く磔は一
 を陰を左、陽を右に爲し、斜
 に書き頭はしたる畫あり
 故に運筆の方法は一を逆
 に陰點より書くあり
 此畫は上に示せる永字第
 八畫の如く文字の右側に
 用ふる斜畫あり



掠

上に示したる如く掠は一
 を陰を上、陽を下に爲し、斜
 に書き頭はしたる畫あり
 故に運筆の方法は一を逆
 に、陰點より書くあり
 此畫は上に示せる永字第
 六畫の如く文字の左側に
 用ふる斜畫あり

鶯 浮



陰 陽

浮 鶯

上に示したる如く浮鶯は
飛雁と同じく一の陰を上
に折り返したる畫あれど
も、上端を陰の形に書くは
不可能あるに因り、上端を
も陽の形に書き顯はすあ
り
此畫は光字第六畫の如く
文字の右下に用ふる折畫
あり

雁 飛



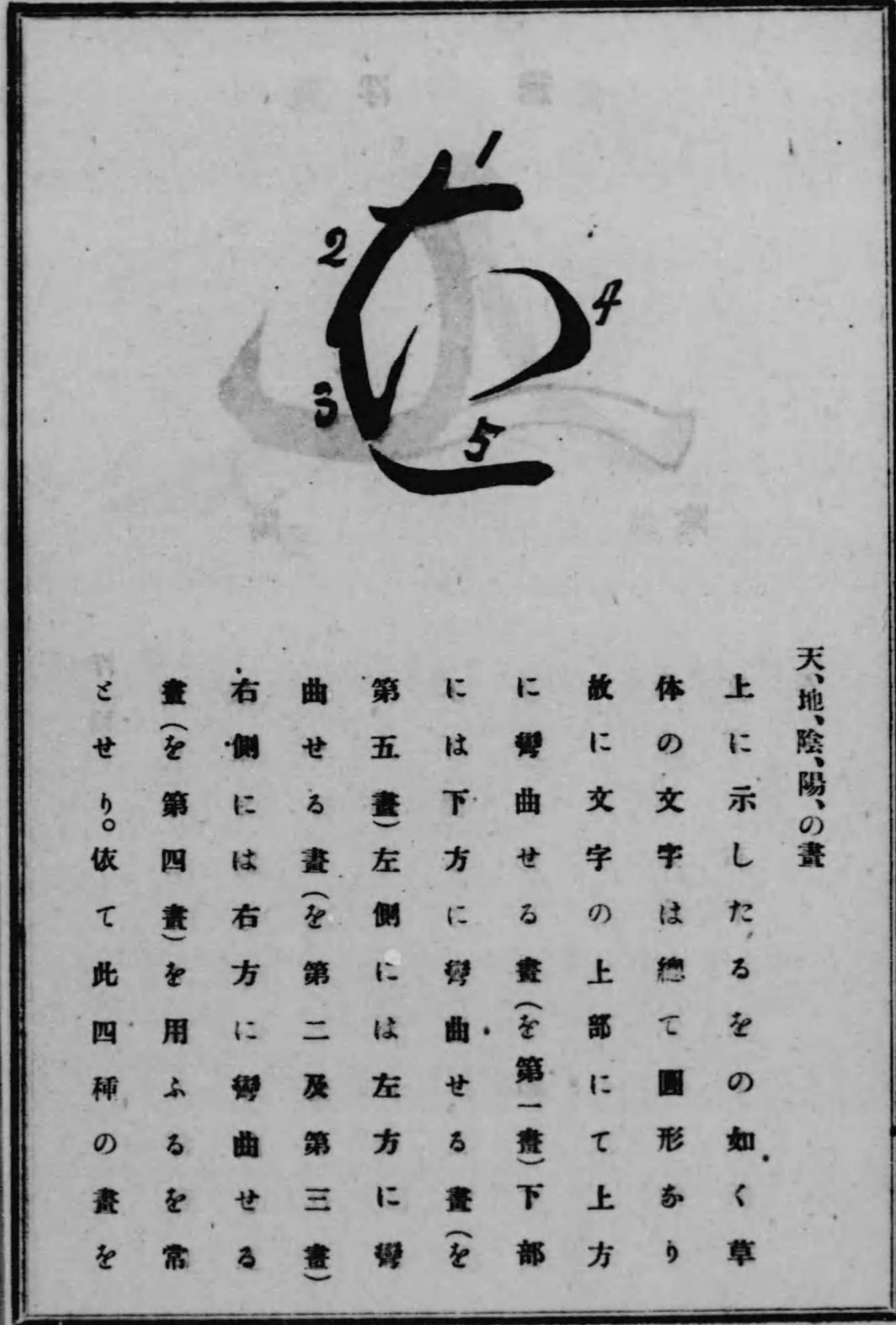
陰 陽

飛 雁

上に示したる如く飛雁は
左方を陰、右方を陽とせる
一の陰を上折り返した
る畫あり。然れども上端
を陰の形に書くは不可能
あるか故に上端をも陽の
形に書き顯はすあり
此畫は或字第六畫の如く
文字の右側に用ふる斜畫
あり



區別せん爲、上圖に示せる
 如く、上方に彎曲せる畫を
 天畫、下方に彎曲せる
 畫を地畫、左方に彎曲せる
 畫を陽畫、右方に彎曲せる
 畫を陰畫、と名つけたり



天、地、陰、陽、の畫

上に示したるをの如く草
 体の文字は總て圓形あり
 故に文字の上部にて上方
 に彎曲せる畫(を第一畫)下部
 には下方に彎曲せる畫(を
 第五畫)左側には左方に彎
 曲せる畫(を第二及第三畫)
 右側には右方に彎曲せる
 畫(を第四畫)を用ふるを常
 とせり。依て此四種の畫を

一字八法圖 其一



一字八方圖

既に説明せる如く草書に於ては文字の上部には左方に彎曲せる畫を要するが故に上に示せる八法圖の天畫の如く、陽を左、陰を右に爲せる一を用ふるあり。次に下部には下方に彎曲せる畫を要するが故に八法圖に示せる地畫の如

一字八法圖 其二



く、陰を左、陽を右に爲せる一を用ふるあり。次に左側には左方に彎曲せる畫を要するが故に八法圖に示せる陽畫の如く陽を上、陰を下に爲し一を縦に書くあり次に右側には右方に彎曲せる畫を要するが故に八法圖に示せる陰畫の如く、陰を上、陽を下に

爲し一を縦に書くあり。次に左上の角には、左上に
 彎曲せる畫を要するが故に、八法圖に示せる左上の
 畫の如く陽を右上、陰を左下に向け一を斜に書くか
 り。次に左下の角には、左下に彎曲せる畫を要する
 が故に、八法圖に示せる左下の畫の如く陽を左上、陰
 を右下に向け一左斜に書くあり。次に右上の角に
 は右上に彎曲せる畫を要するが故に、八法圖に示せ
 る右上の畫の如く陽を左上、陰を右下に向け一を斜
 に書くあり。次に右下の角には、右下に彎曲せる畫
 を要するが故に、八法圖に示せる右下の畫の如く、陰
 を右上、陽を左下に向け一を斜に書くあり。以上説
 明せし各畫に文字を當て候むるときは八法圖其二
 に示せるが如し

一第



二第



上に示せるは左側の縦
 畫は陽の一にして、右側の
 縦畫は陰の一あり。故に
 右側の縦畫は上端を陰下
 端を陽の形に爲すべし
 第二の如く右側の縦畫の
 上端を陽の形に爲すとき
 は左側の縦畫と同一形に
 爲りて醜し

一第

二第



上に示せるたの縦畫は陰
の一あり。故に上端は陰
下端を陽の形に書くべし
第二に示せる如く上端を
陽、下端を陰の形に書くは
宜しからず

一第

二第



上に示せるたの縦畫は右
下の一あり。故に上端を
陰、下端を陽の形に書くあ
り
第二に示せる如く上端を
陽、下端を陰の形に書くは
宜しからず



上に示せる如く草書の木
 の縦畫は陰の一あり。故
 に上端を陰、下端を陽の形
 に書くへし
 第二に示せる如く上端を
 陽、下端を陰の形に書くは
 宜しからず



上に示せる如く草書の拜
 の縦畫は陰の一あり。故
 に上端を陰、下端を陽の形
 に書くへし
 第二に示せる如く縦畫の
 上端を陽、下端を陰の形に
 書くは宜しからず

一第

二第



三

上に示せる如く乃の左側の斜書は右下の一あり故に上端を陰、下端を陽の形に書くへし
 第二に示せる如く上端を陽、下端を陰の形に書くは宜しからず

一第

二第



三

上に示せる如く乃の第一畫を中央より左に片寄せしむるときは、左方に彎曲せしめざる可からず故に八法圖に於ける左上の一を用ふるあり
 第二に示せる如く右方に彎曲せしむるは宜しからず

二第

一第



上に示せるめの第二畫を
 中央より左側に片寄らし
 むるときは八法圖に於け
 る右下の一を用ふるかり
 故に上端を陰、下端を陽の
 形に書くへし
 第二に示せる如く第二畫
 を右方に彎曲せしむるは
 宜しからず

二第

一第



上に示せる如くの第一
 畫及めの第二畫を右方に
 彎曲せしめんと欲すると
 きは中央より右に片寄ら
 しむるを要す

一第

二第

上に示せる^るの第五畫は
文字の下部あるが故に下
方に彎曲せしめ地畫とあ
さざる可からず
第二に示せる如く下部の
畫を上方に彎曲せしむる
は宜しからず

一第

二第

上に示せる如くはの右側
の縦畫の下端を圓形に彎
曲せしむるときは中央よ
り右に陽畫を顯はし極め
て醜し
故に第二に示せる如く縦
畫の下端は左下に刎ね出
すを要す

一第

二第



上に示せる第一の如く路
 の傍の縦畫に左方に彎曲
 せる部を生せしむるとき
 は文字の中心より右に陽
 畫を顯はし極めて醜し
 故に第二に示せる如く旁
 の縦畫は充分右方に彎曲
 せしめ總て陽畫と爲すあ
 り

四

一第

二第



上に示せる如くでの第二
 畫は左方に彎曲せる畫か
 るに因り文字の中心より
 左に片寄さざる可からず
 若し此第二畫を第一に示
 せる如く中心より右に片
 寄らしむるときは文字の
 右側に陽畫ありて醜し

四

一第

二第

規

規

上に示せる第一の如くれ。

の旁は上部を右方に彎曲

せしめ陰畫に爲すあり

第二に示せる如く上部を

も左方に彎曲せしむると

きは陽畫とありて醜し

上

示

哭

一第

二第

梅

梅

上に示せる如く梅の旁の

縦畫は文字の中心より右

に片寄れるが故に第二の

如く右方に彎曲せしめ陰

畫に爲すあり

第一に示せる如く左方に

彎曲せしめ陽畫に爲すは

宜しからず

哭

一第

二第

海 海

上に示せる如く囑の傍の
縦畫は文字の中心より右
に片寄れるが故に第一の
如く右方に彎曲せしめ陰
畫と爲すあり
第二に示せる如く左方に
彎曲せしめ陽畫と爲すは
宜しからず

囑

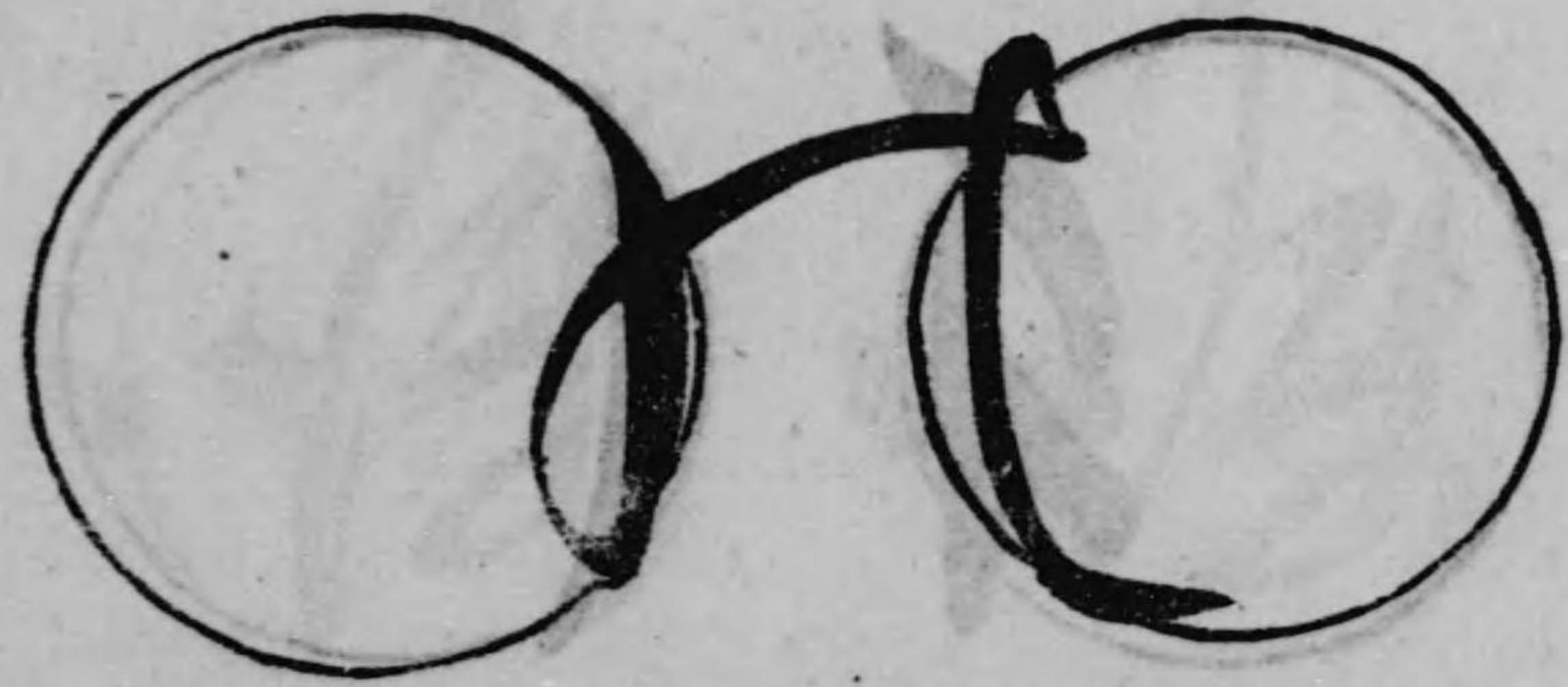
海 海

草書には上に示せる那の
如く、全く分離せる二圓の
形とある文字あり
斯の如く二圓の形にある
可き文字は普通の文字の
反對に左側に陰畫、右側に
陽畫あるも差支あし

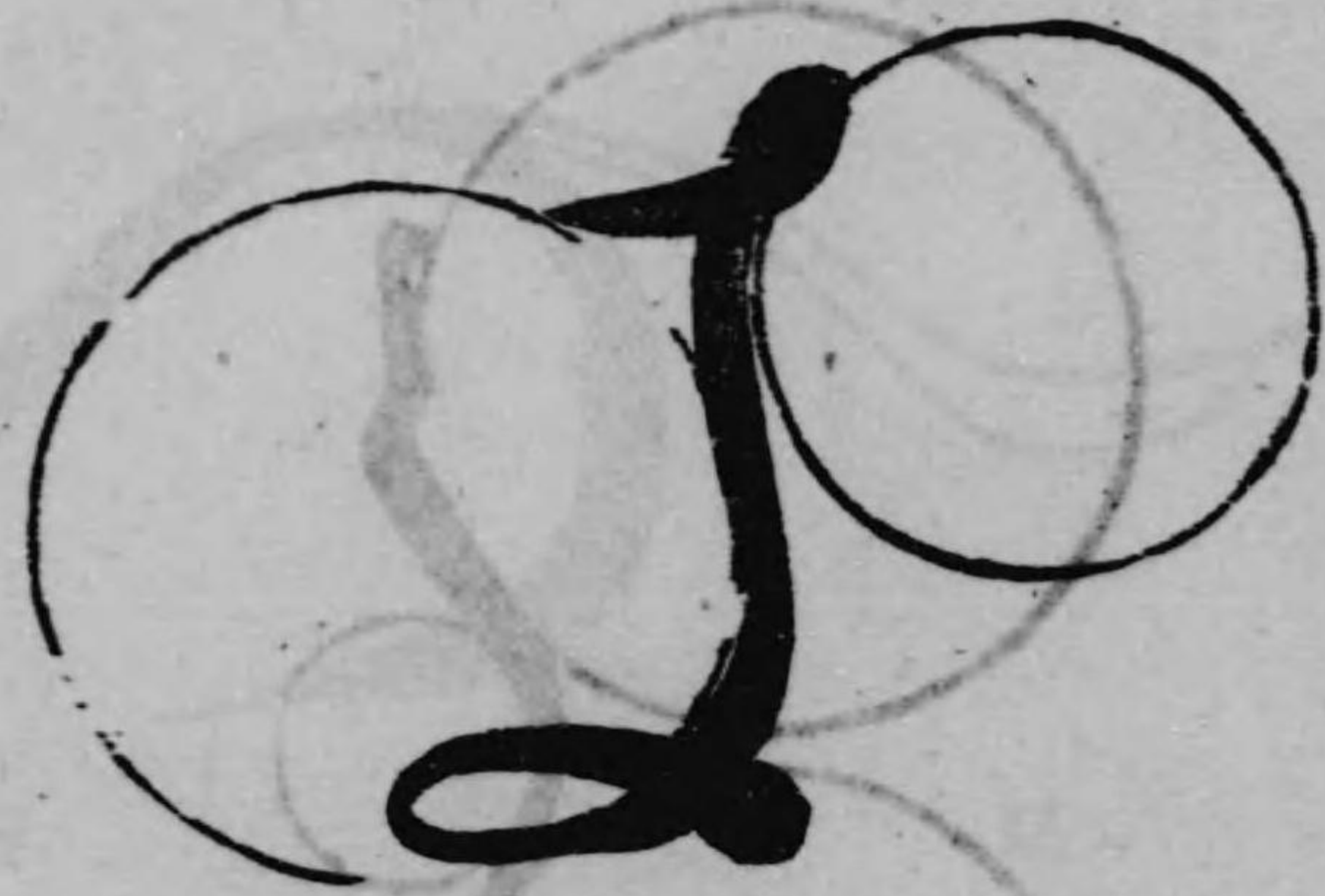
囑



上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 あ
 は
 外
 接
 せ
 る
 二
 圓
 の
 形
 に
 書
 き
 顯
 は
 す
 こ
 と
 あ
 り



上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 わ
 は
 全
 く
 分
 離
 せ
 る
 二
 圓
 の
 形
 あり
 故
 に
 普
 通
 の
 文
 字
 の
 反
 對
 に
 左
 側
 を
 陰
 畫、
 右
 側
 を
 陽
 畫
 に
 あ
 る
 事
 全
 く
 依
 前
 頁
 の
 那
 に
 同
 じ



上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 二
 圓
 に
 跨
 れ
 る
 文
 字
 は
 右
 側
 に
 陽
 畫
 を
 顯
 は
 し
 又
 は
 左
 側
 に
 陰
 畫
 を
 顯
 は
 す
 も
 差
 支
 か
 し



上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 明^〇
 は
 外
 接
 せ
 る
 二
 圓
 の
 形
 に
 書
 き
 顯
 は
 す
 こ
 と
 あ
 り

草書の獅の口



陰

陽

草書の獅の口

草書の獅の口は上に示せる如く、陰を左、陽を右にせる一の陽点を左下に折り返したる畫あり。故に上端は陰下端は陽の形に書き顯はすあり



上に示せる如く三圓に跨れる文字も二圓に跨れる文字と同様に右側に陽畫を顯はし又は左側に陰畫を顯はすも差支あり

二第

一第

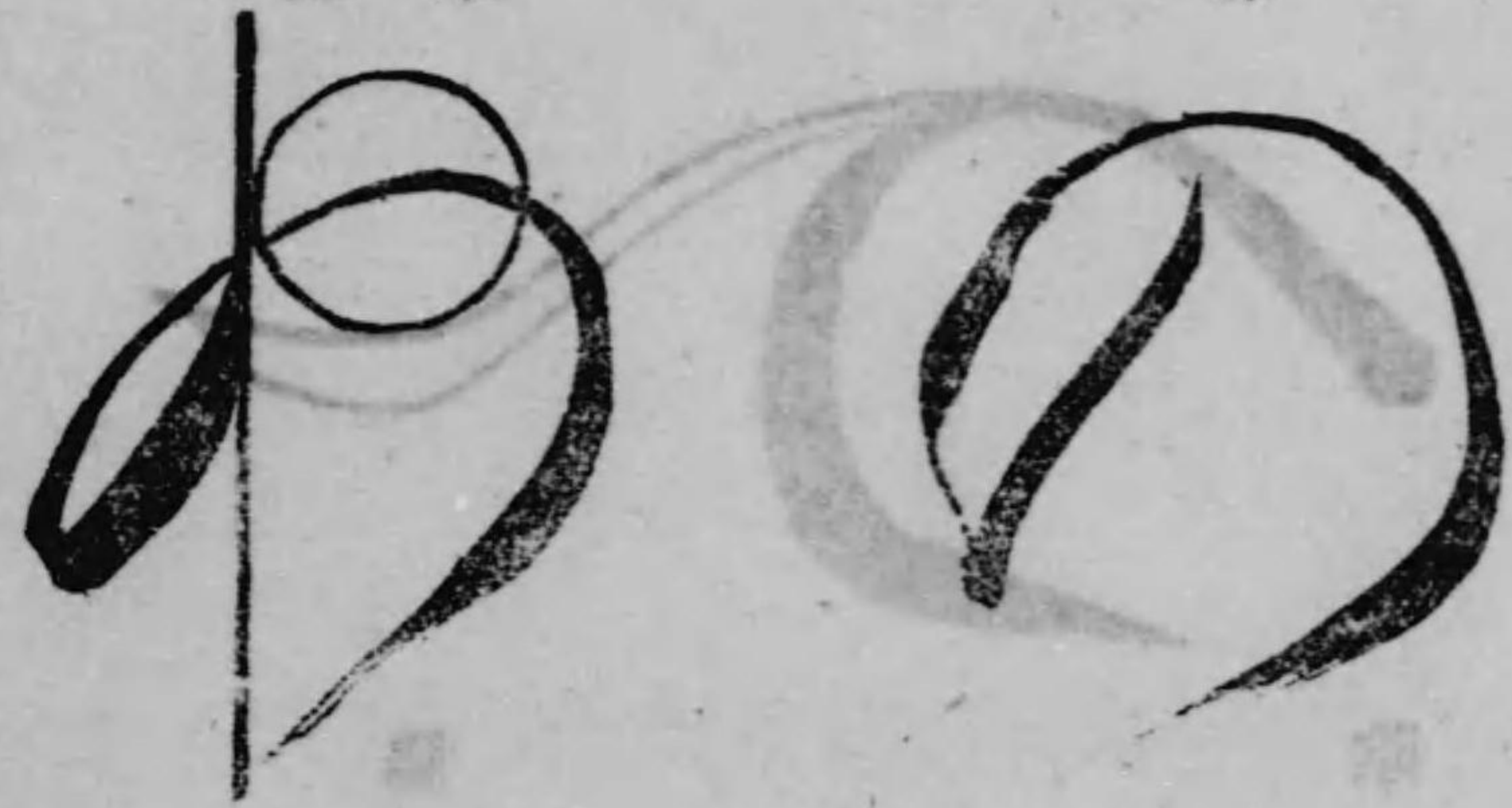


虎爪
 上に示したる虎爪は
 八法圖に於ける陰の
 一を上に示せる第二
 の如く陽點を陰點と
 の境より一度上に折
 の境より一度上に折
 り更に下方に折返
 したる畫あり

毛

二第

一第



上に示せるの第二畫は
 獅口あり。故に第一に示
 せる如く、陽點は文字の中
 心に到らば直に下方に折
 るあり。若し第二に示せ
 る如く、中心より右に到り
 尙右上に曳き延すときは
 文字の右側に陽畫を顯は
 し極めて醜し

英

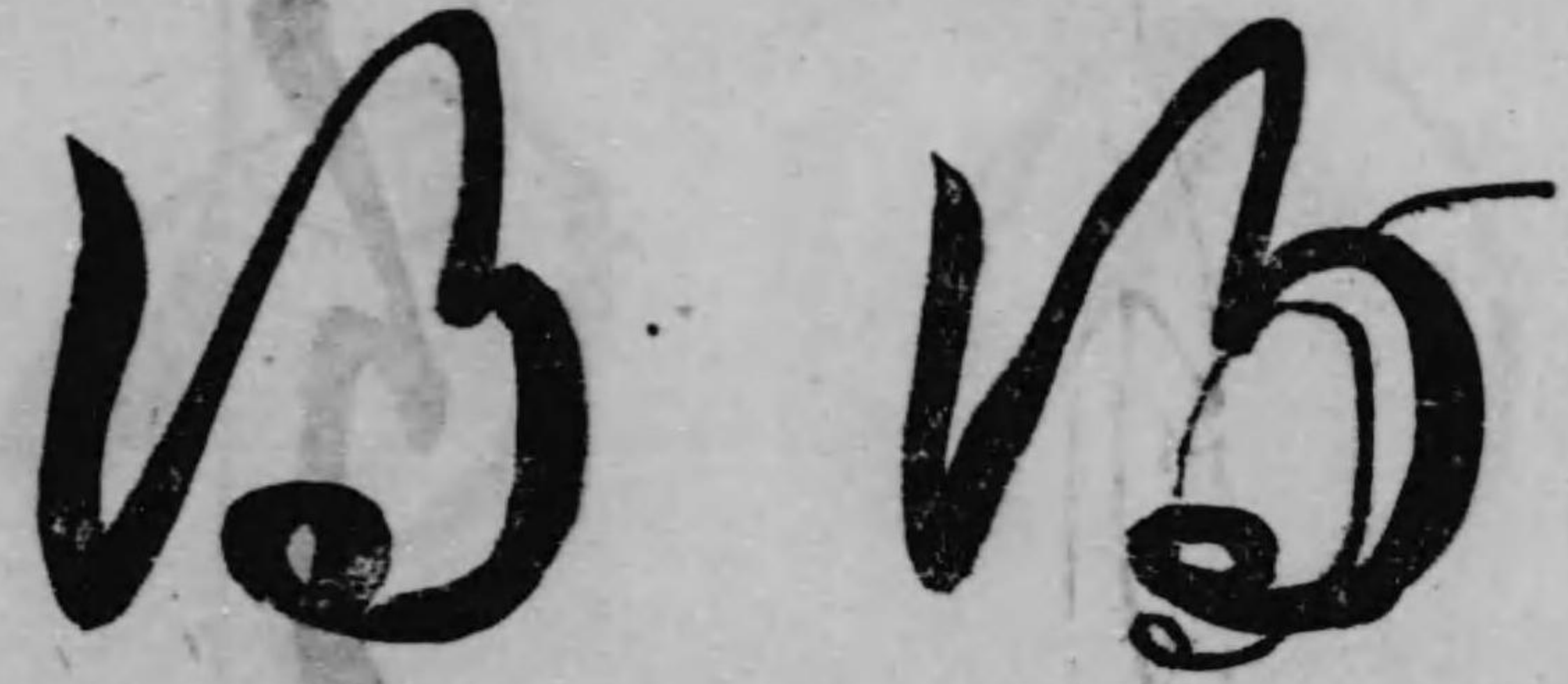
耳 殼



耳 殼

上に示せる如く耳殼は、陰を上、陽を下にせる一を耳殼の形に彎曲せしめたる畫あり

第 一 第 二



虎爪は上に示せる如く文字の右側に用ふる縦畫あり。故に第一に示せる如く強く右上に刎ね上げ旁に陽畫に見ゆる部を生せしむるは宜しからず。因て第二に示せる如く直に下方に折り下くるを要す

面 横



横 面
 上 に 示 せ る 如 く 横 面
 は 陽 を 上、陰 を 下 に せ
 る 一 を 中 央 よ り 一 度
 上 方 に 折 り、更 に 下 方
 に 折 り 返 し た る 畫 か
 り

第 一 第 二



耳 殼 は 上 に 示 せ る 如 く 文
 字 の 右 側 に 用 ふ る 縦 畫 か
 り。 故 に 第 一 に 示 せ る 如
 く 強 く 右 上 に 刻 ね 上 け 陽
 畫 に 見 ゆ る 部 を 生 せ し む
 る は 宜 し か ら ず

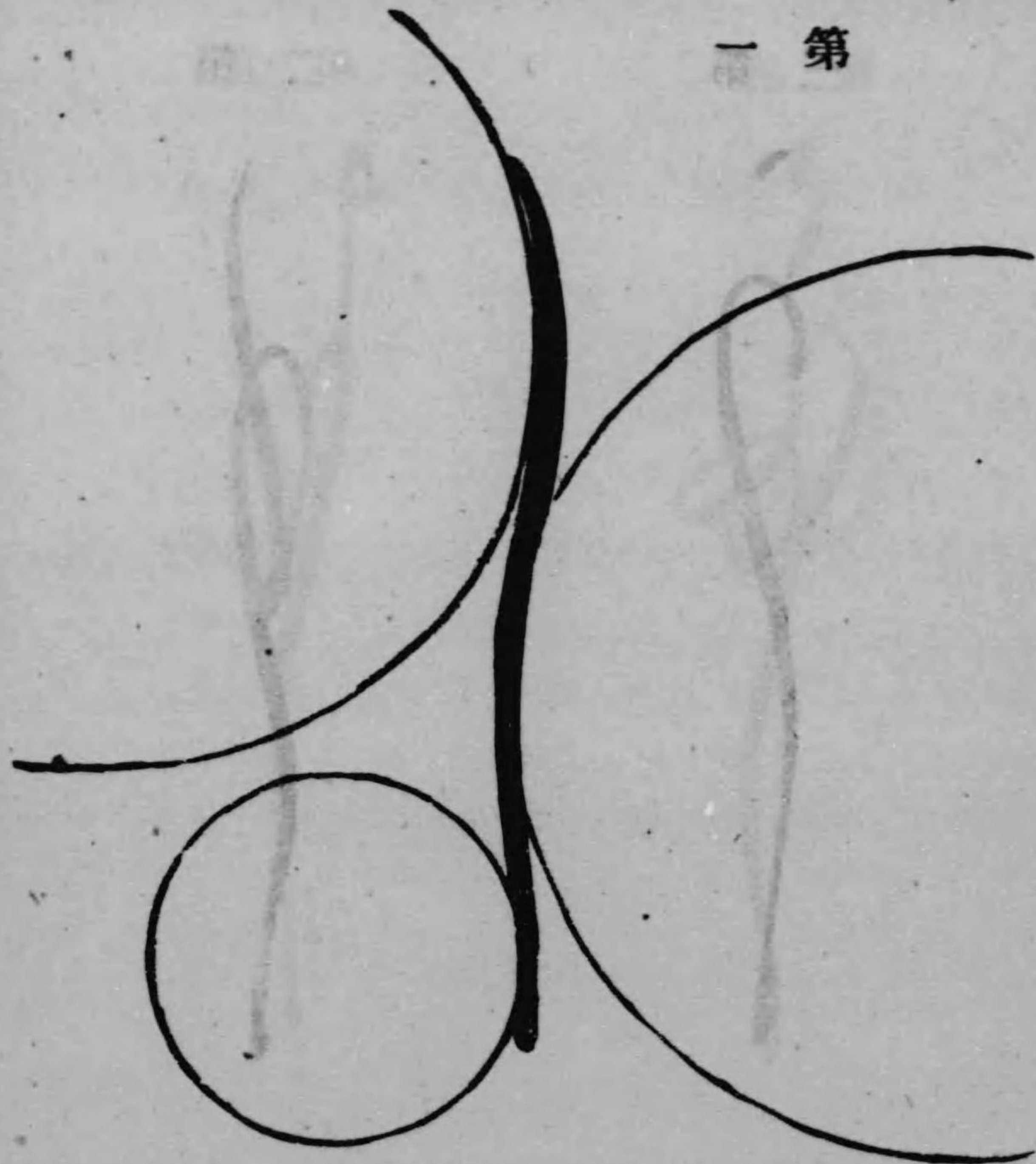
第一 第二



横面は上に示せる如く文
字の左側に用ふる縦畫を
り。故に第二に示せる如
く、總て左方に彎曲せしめ
陽畫と爲すあり。第一の
如く中部を右方に彎曲せ
しめ、陰畫に見ゆる部を生
せしむるは宜しからず

空

第一



和様のし
上に示せ
る如く和
様のしは
上下の兩
部は右方
に彎曲せ
しめ陰畫
に爲し、中
部は左方
に彎曲せ

空

二第

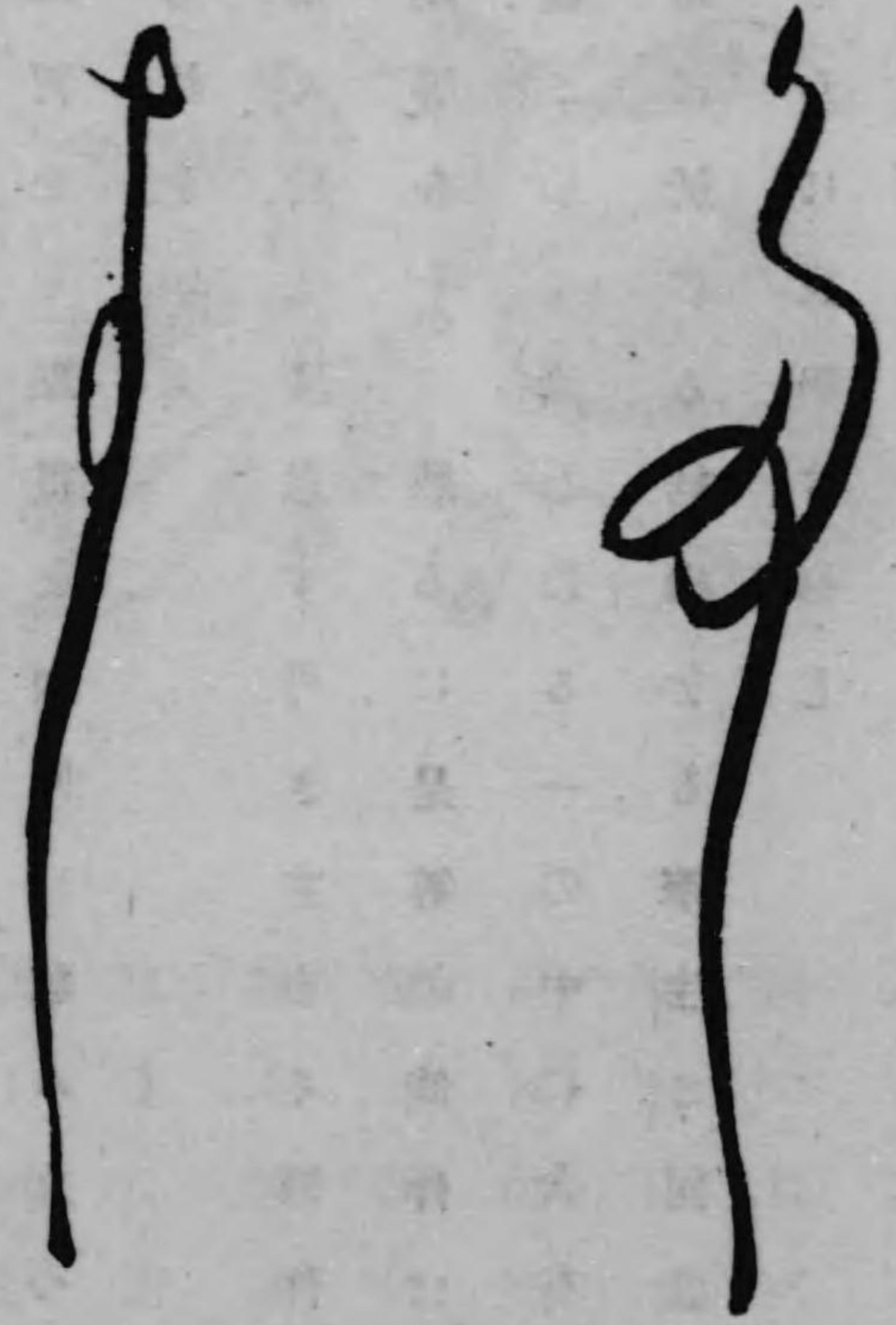
三第



しめ 陽 畫
 に 爲 す 亦
 り
 此 し は 第
 二 以 下 に
 示 せ る 如
 く 何 れ の
 文 字 に も
 連 繫 し 得
 る 假 名 文
 字 の 連 續

四第

五第



上 極 め て
 大 切 ち る
 縦 畫 ち り

二、結構

結構とは文字の格構を整ふる方法にして筆法に於て練習せる點畫を如何に組み立つ可きかを研究する方法をいふ
結構に於て注意す可き主ある條件は結構及文字の陰陽等あり。然るに是等の條件は悉く既に筆法の基礎として論じたる一の中に含有せり故に總ての書體に於ける結構をも筆法と同様に此一を基礎として左に説明すへし

結構の陰陽

筆法に於て一を陰陽の二部に分解し得たる

矣

第一



と同様に上に示せる第一の如く一字の結構をも陰陽の二部に分解し得るあり。而して結構に於ける此兩部の性質は筆法と全く相一致せること次の如し
即ち筆法の一に於て陽點は上に折りて左端を高く爲し陰點は下に折りて右端を低く爲したると同様に、一字の結構に於ても陽

矣

二 第

三 第

陽○ 千

陽○ 千

は左端を高く、陰は右端を
低く書き願はすあり

故に第二に示したる如く
千を書きても第一畫たる
斜ある撥の末端を低く書
き下けて、第二の横畫と左
方に於て交らんと欲する
如く書くときは、陽の充實
を缺きて見苦しきものあ
り

充

四 第

五 第

○陰 皿

○陰 皿

依て第三に示したる如く
上の撥は左端を成る可く
高く刺ね出し其末端にて
陽部を充實せしむるあり
次に第四に示せる如く皿
を書きても、下の横畫の右
端を高く爲して、上の横畫
と右方に於て交らんと欲
する如く書くときは、陰の
充實を缺きて見苦しきも
のあり

充

言 王

故に第五に示したる如く
下の横畫は右端を低く爲
し、其末端にて陰部を充實
せしむるあり
扁は總て陽部に屬す。故に
上に示したる如く、第一横
畫は左端を成る可く高く
書きて陽の上端を充實せ
しめ、第二以下の横畫は漸
次右端を高く書き頭はす
を要す

牙 牙

上に示したる如く扁の上
部に位する撥は、横に刎ね
出し末端にて陽の上端を
充實せしむるあり

上に示したる如く扁の小
 ある文字は扁を上詰
 めて陽の上端を充實せし
 むるあり

上に示したる如く人扁の
 撥は上端を左方に寄せて
 陽の上端を充實せしむる
 あり
 次に糸扁の第二畫は右端
 を下くるときは陰畫とあ
 りて陽部に適合せず。故
 に右端を高く書きて陽畫
 と爲すを要す



上に示したる如く左右の
 二部に分ち得る冠は、左方
 の部を高く書きて、陽の
 上端を充實せしむるあり



上に示したる如く陽を強
 く書き顯はさんか爲には
 成の如く、飛雁の上部を左
 に寄せ、又は國の如く飛雁
 の上部を上に出せしむ
 ることあり



上に示したる如く上下の
 二部に分かるゝ文字は下
 部を右方に片寄せて陰を
 充實せしむるあり



上に示したる如く旁の小
 ある文字は旁を下に詰め
 て陰を充實せしむるあり



上
 に
 示
 し
 た
 る
 如
 く
 垂
 を
 有
 する
 文字
 は
 下部
 を
 右
 に
 片
 寄
 せて
 陰
 を
 充
 實
 せ
 し
 む
 る
 あり



上
 に
 示
 し
 た
 る
 如
 き
 文
 字
 は
 下
 部
 の
 横
 畫
 を
 斜
 に
 爲
 し
 陰
 を
 充
 實
 せ
 し
 む
 る
 あり



上カに示したる如く陰を充
 實せしむるに困難ある文
 字は特に、點を書き加ふる
 ことあり



上カに示したる如き文字は
 旁の縦畫を長く曳き延は
 して陰を充實せしむるあ
 り

一第

二第



隸書

楷書は上に示したる第一の如く左側の縦畫は上端を上に露はし、右側の縦畫は下端を下に露はせども、隸書は第二の如く左側の縦畫は下端を下に露はし右側の縦畫は上端を上に出すこと楷書の反対あり。次に楷書に於ては文字の内部に挿入すべき短

三第

四第



き横畫は左端を縦畫に接觸せしめ、右端は縦畫との間に空所を残すを常と爲せども、隸書は内部の横畫は普通右端を縦畫に接觸せしめ左端は縦畫との間に空所を生せしむ。又楷書は一般に横畫の右を上くれども隸書は右を下くすること全く楷書の裏あり。又楷書は第三に示せる令

第五第

第六第

秋 禾

に於ても、下部に位せる斜
ある撥を横畫の右端より
勿ね出せども隸書に於て
は此撥を横畫の左端より
勿ね出し、又楷書に於ては
第五に示せる秋に於ても
火を旁と爲せども隸書に
於ては、第六に示せる如く
火を扁と爲す如く隸書と
楷書とは總て表裏の關係
あるが如し

八

第一第

第二第

目 日

陽字と陰字

總て文字には各字陰陽の
二部あること前述の如し
然るに尙文字には陽字と
陰字との別あり。即ち上
に示せる日及目の如く内
部の點畫を陽部に片寄ら
しめ、右側に空所を残す文
字を陽字と稱し

全

第三 第四

山 中

次に第三、第四に示せる如く内部の點畫を陰部に片寄らしめ、左側に空所を殘す文字を陰字と稱す
文字の陰陽上に於ける縦横兩畫の關係

次に示せる如く縦畫と横畫との交叉より成れる文字に於て第一の如く縦畫を右に片寄らしむるときは横畫は自然左に片寄り

第一 第二

十 十

たる形に見え又第二の如く縦畫を左に片寄らしむるときは横畫は右に片寄りたる形に見ゆる如く、縦畫と横畫とは互に背行す故に第三、第四に示せる如く縦横兩畫の交叉より成れる文字は横畫を標準と爲さば陽字とあり、縦畫を標準と爲さば陰字とあり結局陰陽何れに屬すべき

一の縮



草書の結構

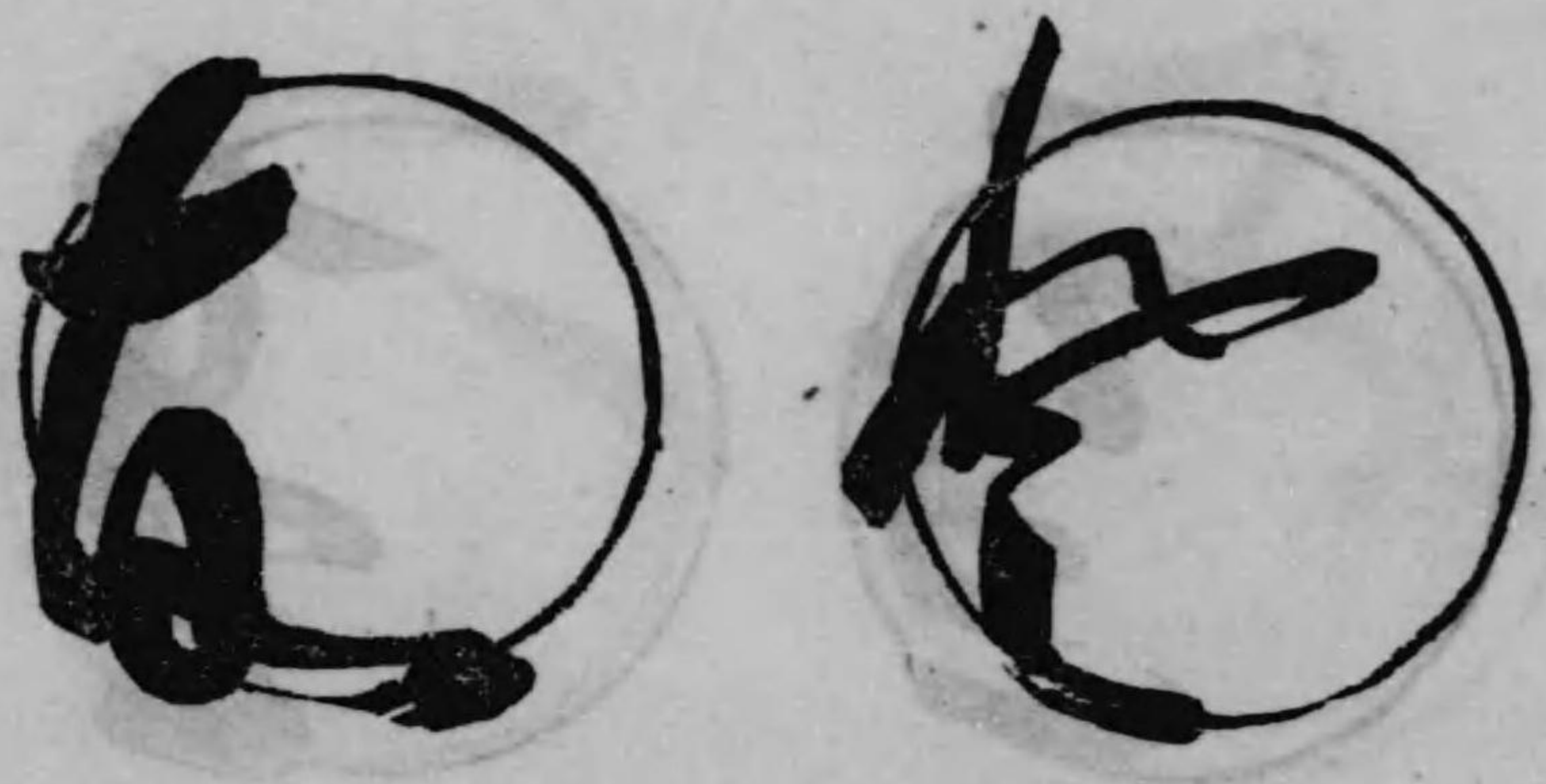
楷書の字形は楷書の一の
縮せる形に歸したりし
と同様に草書の字形は草
書の一の縮せる形に歸
するものあり。故に草書
の字形を識らんと欲せば
先草書の一を吟味せざる
可からず。一は第八頁に示せ
し如く陰陽兩點共楷書の

第四

第三



か其判断に苦しむが如し
と雖も縦畫は横畫に比し
一般に標準力強きが故に、
斯の如き文字は普通、縦畫
を標準と爲し陰字と見る
あり



草書に於て全圓の形に書
 き顯はし難き文字は上に
 示せる如く、圓の左端に押
 し詰めたる形に書き顯は
 すあり
 斯の如く左端に押し詰め
 たる形に書く文字を陽字
 と稱す



如く角立つことかく其周
 邊總て波状を呈せり。依
 て是を收縮せしむるとき
 は前頁に示せる如く畧圓
 形にふるあり。
 故に上に示せる如く草書
 の字形は主体を圓形に爲
 し、左側の上端と右側の下
 端とを圓外に出して陽の
 上端と陰の下端とを充實
 せしむるあり



上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 圓
 の
 上
 端
 に
 押
 し
 詰
 め
 た
 る
 形
 に
 書
 き
 顯
 は
 す
 文
 字
 を
 天
 字
 と
 稱
 す



上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 圓
 の
 右
 端
 に
 押
 し
 詰
 め
 た
 る
 形
 に
 書
 き
 顯
 は
 す
 文
 字
 を
 陰
 字
 と
 稱
 す



上
 示
 せ
 る
 如
 く
 同
 一
 文
 字
 と
 雖
 も
 天
 地
 又
 は
 陰
 陽
 何
 れ
 の
 形
 に
 も
 書
 き
 得
 る
 文
 字
 あ
 り

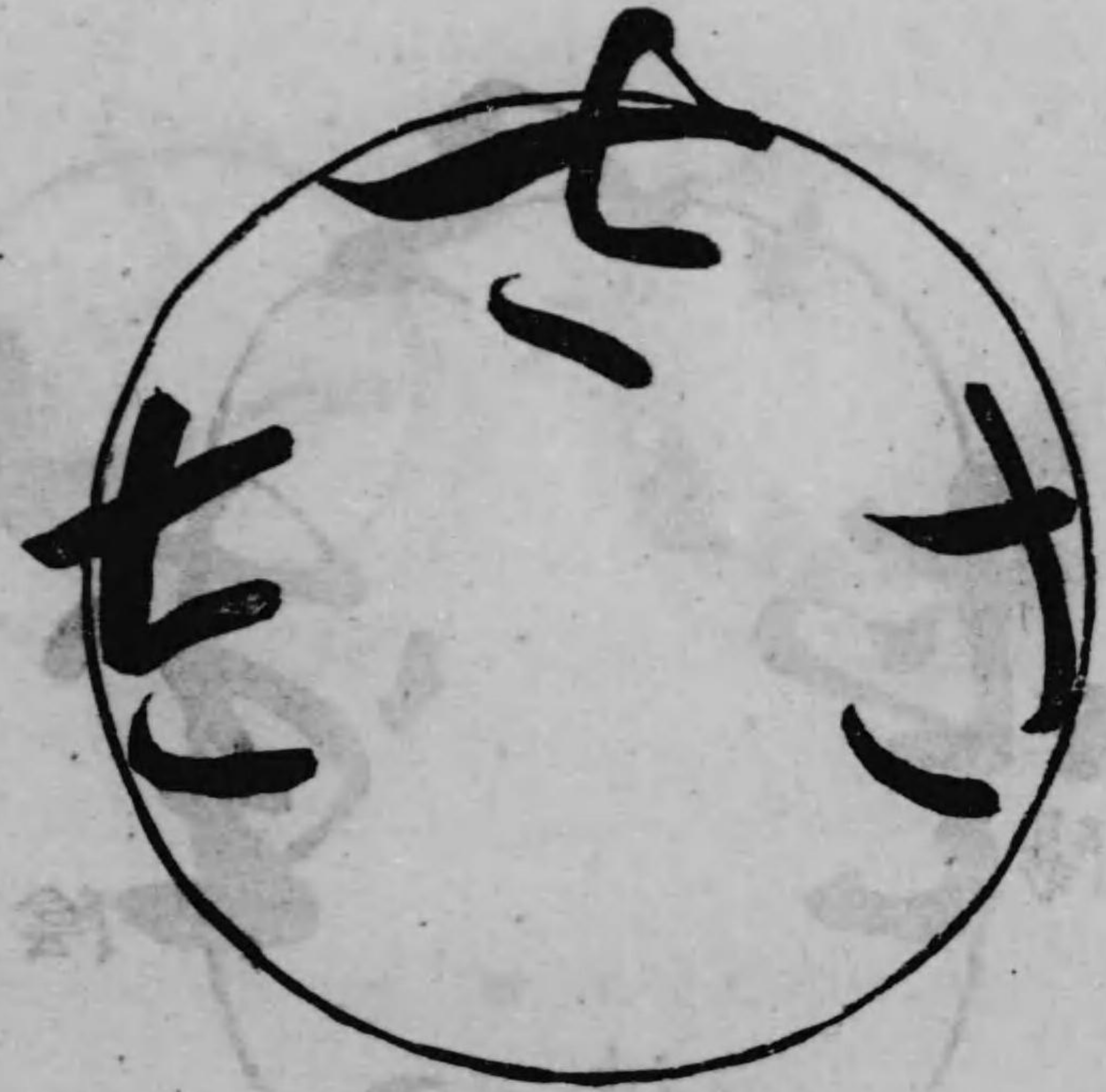


上
 に
 示
 せ
 る
 如
 く
 圓
 の
 下
 端
 に
 押
 し
 詰
 め
 た
 る
 形
 に
 書
 き
 顯
 は
 す
 文
 字
 を
 地
 の
 字
 と
 稱
 す

第一 第二



上に示せる如く如を第一
 の如く書くときは天字に
 あり。第二の如く書くとき
 きは地の字にあるあり

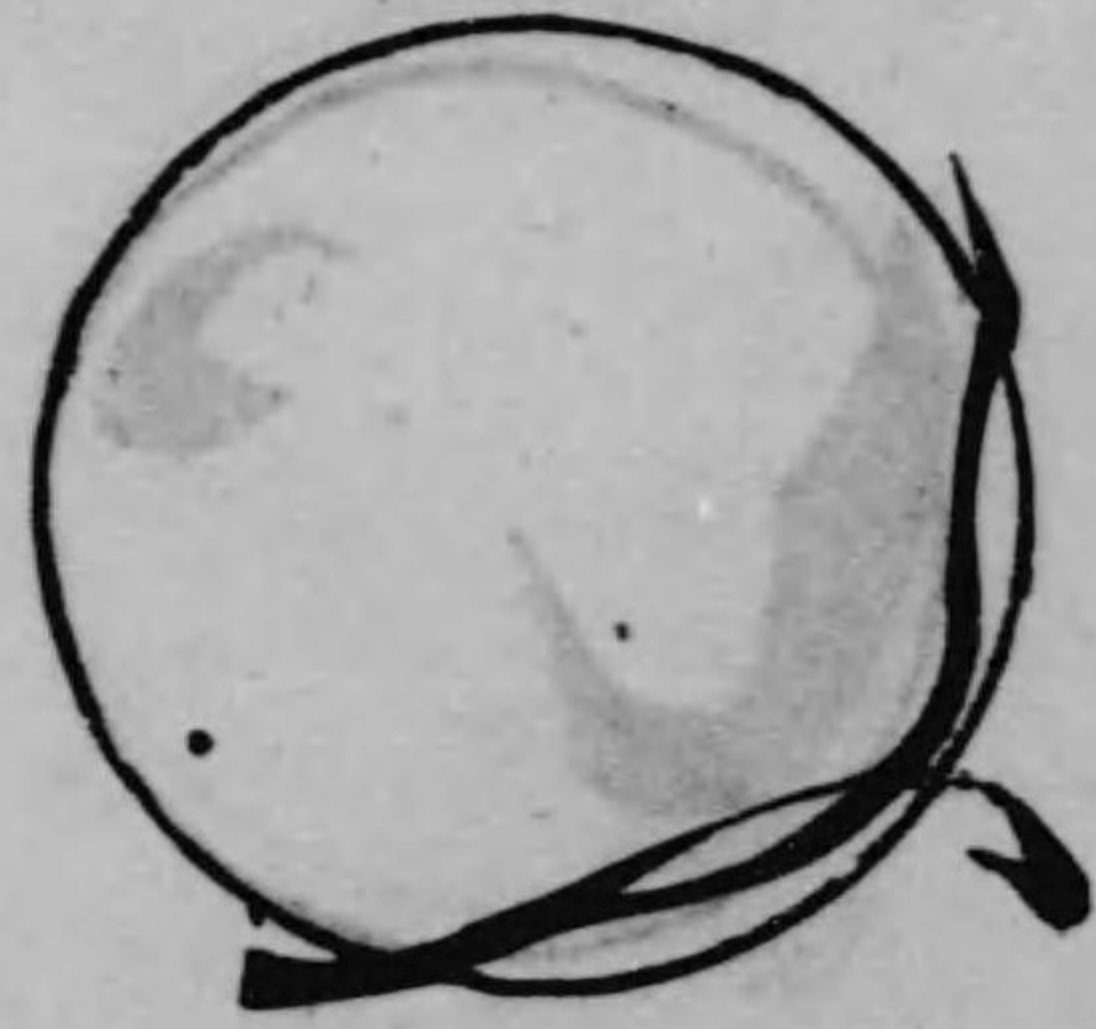


上に示せる如くさ
 は横畫を長く書き
 顯はすときは天字
 にかり。縦畫を左
 方に彎曲せしむる
 ときは陽字にかり
 縦畫を右方に彎曲
 せしむるときは陰
 字にあるあり

二 第



一 第



上 二 示 せ る 第 一 の 如 く ぶ。
 は 第 二 畫 を 右 方 に 彎 曲 せ
 し む る と き は 陰 畫 と あり
 第 二 の 如 く 左 方 に 彎 曲 せ
 し む る と き は 陽 字 と あり
 あり



上 二 示 せ る 如 く あり。
 方 の 如 く 書 く と き は 陽
 字 と あり。 右 方 の 如 く
 書 く と き は 陰 字 と あり
 あり

二 第

一 第



上
に
示
せ
る
如
く
い
は
右
側
の
畫
を
太
く
書
く
と
き
は
陰
字
に
あ
り
。
左
側
の
畫
を
太
く
書
く
と
き
は
陽
字
に
あ
る



上
に
示
せ
る
如
く
は
縦
畫
を
右
方
に
彎
曲
せ
し
む
る
と
き
は
陰
字
に
あ
り
、
左
方
に
彎
曲
せ
し
む
る
と
き
は
陽
字
に
あ
る

二 第



一 第



上に示せる如くたは第一の如く書くときは全圓を構成し、第二の如く書くときは地の字を構成す

二 第



一 第



上に示せる第一の如くはは旁の第一横畫を上方に彎曲せしむるときは全圓を構成し、第二の如く下方に彎曲せしむるときは地の字を構成す

一 第

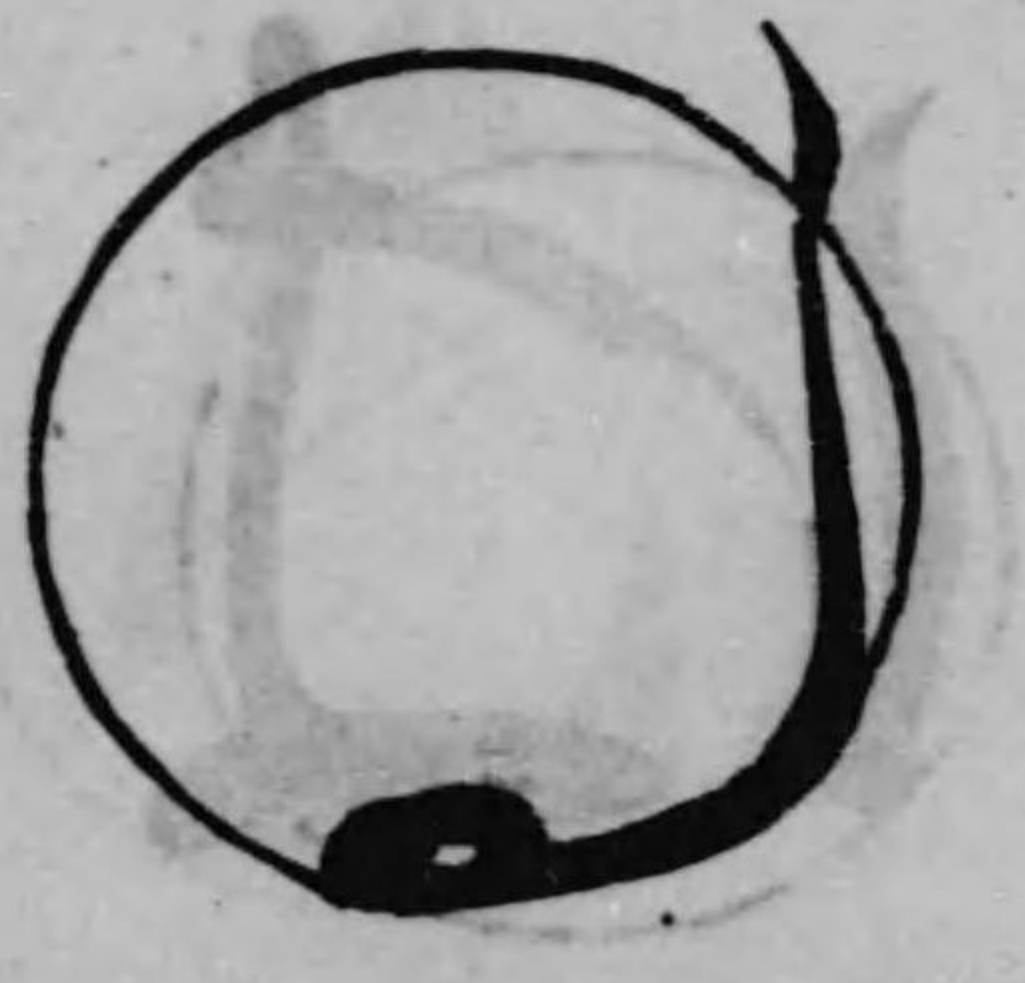
二 第



上に示せる第一の如くん
の第二畫を上方に彎曲せ
しむるときは天字とあり
第二の如く下方に彎曲せ
しむるときは地の字とあ
るあり

一 第

二 第



上に示せるるを第一の如
く書くときは全圓を構成
し第二の如く書くときは
陰字を構成す

二 第



一 第



か。を上に示せる第一の如く書くときは陰字とあり第二の如く書くときは全

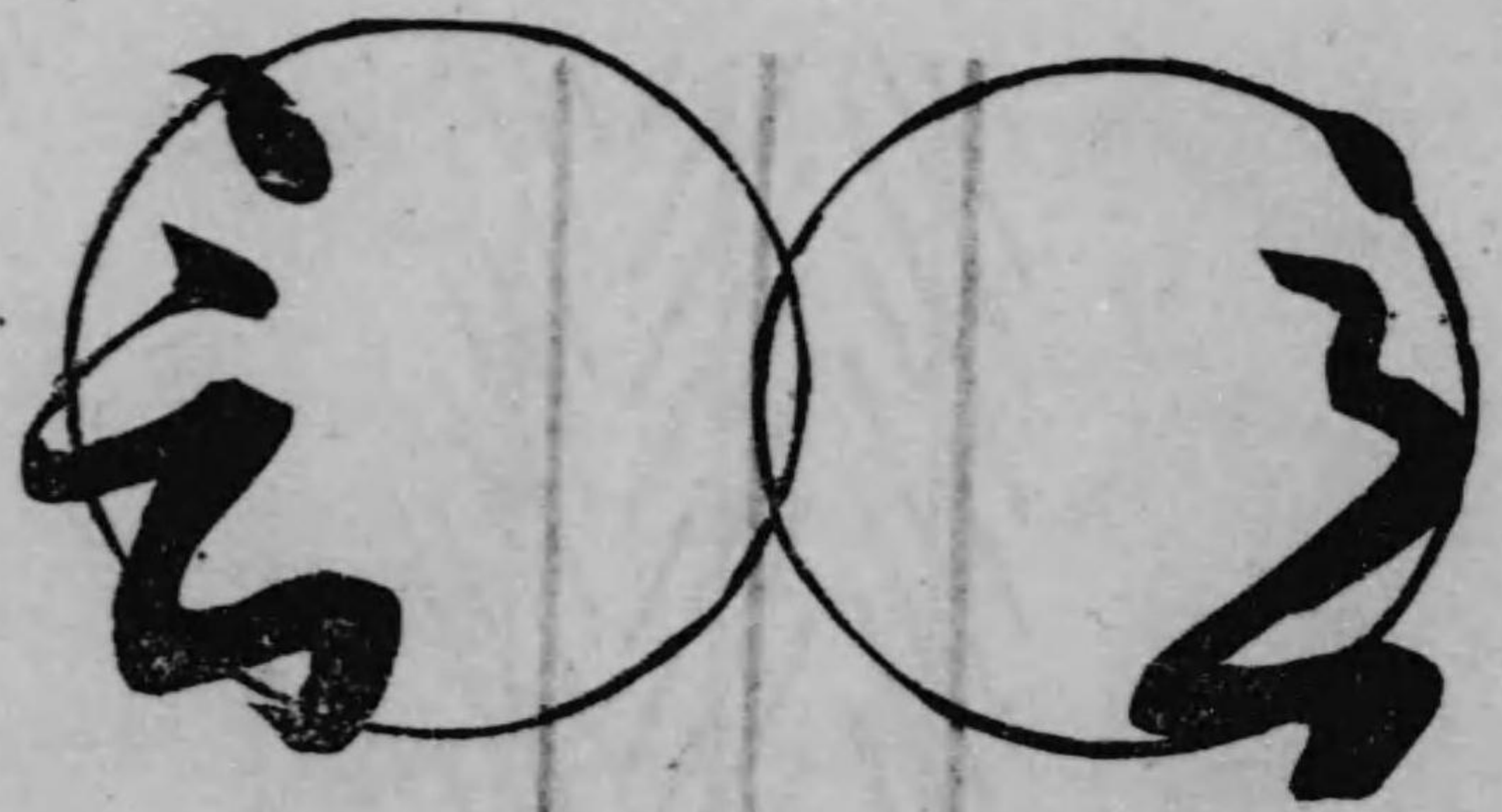
二 第



一 第



上に示せるは。を第一の如く書くときは全圓を構成し、第二の如く書くときは天字を構成す



上に示せる言を第一の如
 く書くときは陰字とあり
 第二の如く書くときは陽
 字とあるあり

二 第

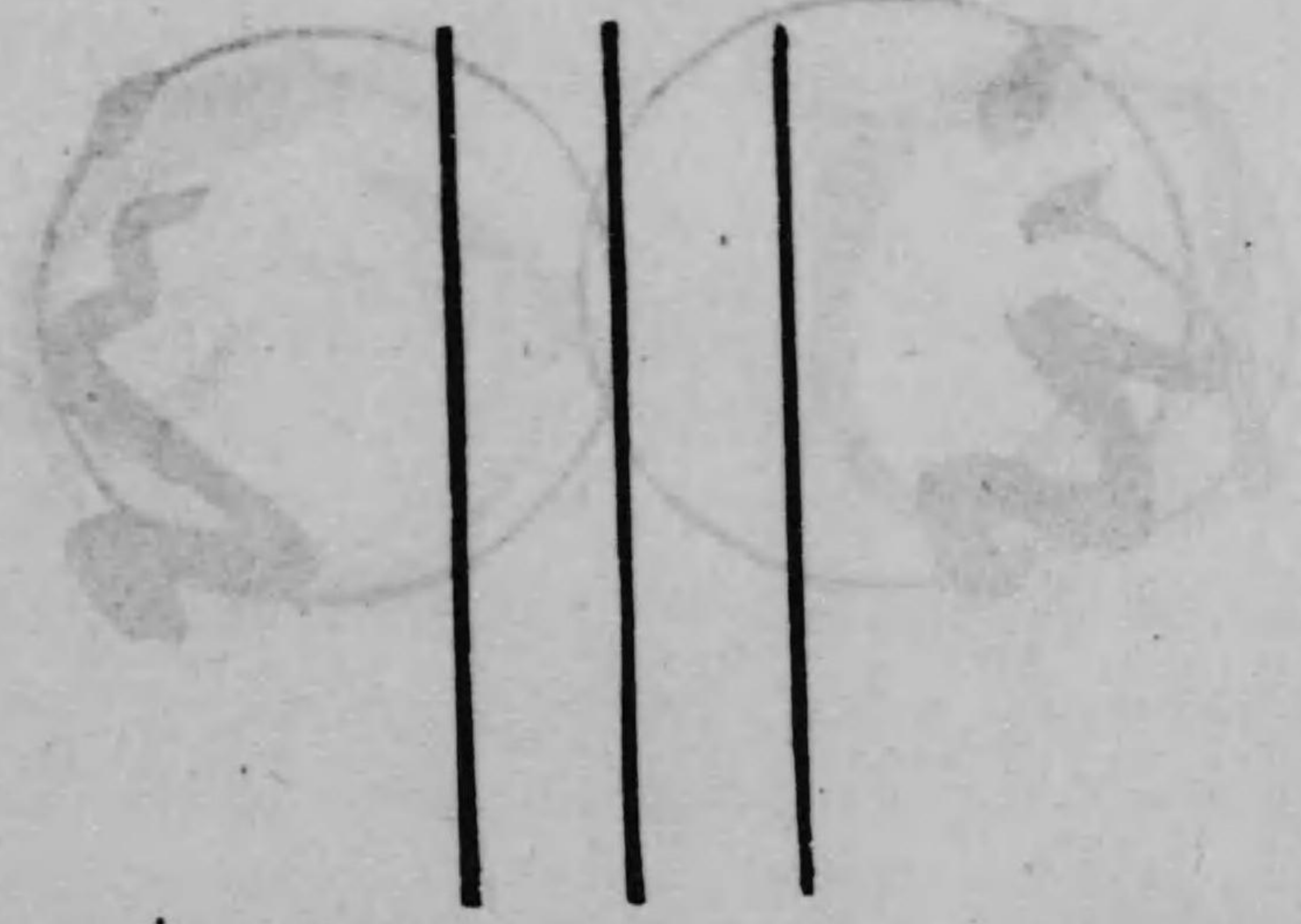
一 第



ひを上に示せる第一の如
 く書くときは全圓の形と
 あり、第二の如く書くとき
 は天宇とあるあり

錯覺作用

吾人の眼には他物の障
 碍に因り事物の實體を
 看破し能はざる作用あ
 り。今上に示せる第一の
 如く三本の並行直線を
 畫き是に第二に示せる
 如く中央の直線には右
 上り左右の直線には右
 下りの斜線を施すとき
 は、中央の直線は斜に見



第一

ゆるに至るあり。然る
 に此直線は、元の並行線
 あるか故に、不並行の形
 に見ゆるに至りしは、後
 に施したる斜線の影響
 たること明あり。斯の
 如く他物の障碍に因り
 事物の實體を見惑ふ作
 用を錯覺と稱し、書道に
 大なる關係を有するこ
 と次の如し



第二

第三 第四



例へは第三に示せる如く
 禾扁の縦畫を垂直に曳き
 下し置き、是に第四畫たる
 斜ある撥を施すときは、其
 垂直ある縦畫は、此瞬間に
 於て上端左に傾きたるか
 如く見ゆるに至るあり
 依て第四以下に示したる

第五 第六



如く斜ある撥を有する文
 字の縦畫は、疎め右方に傾
 け置きて撥を施したる後
 に至り垂直に見ゆる様に
 書き顯はすを要す
 但右下りの文字は此反對
 に縦畫を左方に傾け置く
 あり

三、 連綿

連綿とは文字の配列法をいふ。文字の配列上に於て注意すべき條件は行の彎曲及び陰陽の變化等にして是亦結構と同じく筆法の一に含有す。故に總ての配列法を一を基礎として左に説明すへし

一 縦行の陰陽

筆法の基礎たる一に陰陽の二部ありしと同様に連綿に於ても各行に此二部あり。即ち縦行は上方三分の二を陽と名つけて字形を大きく爲し下方三分の一を陰と名つけて字

形を小さく爲すあり

陰陽の境は其形を最も小にし、最後の一字は稍大にす。又二行以上を並ぶるには陰陽を反對にせる行を配合することあり

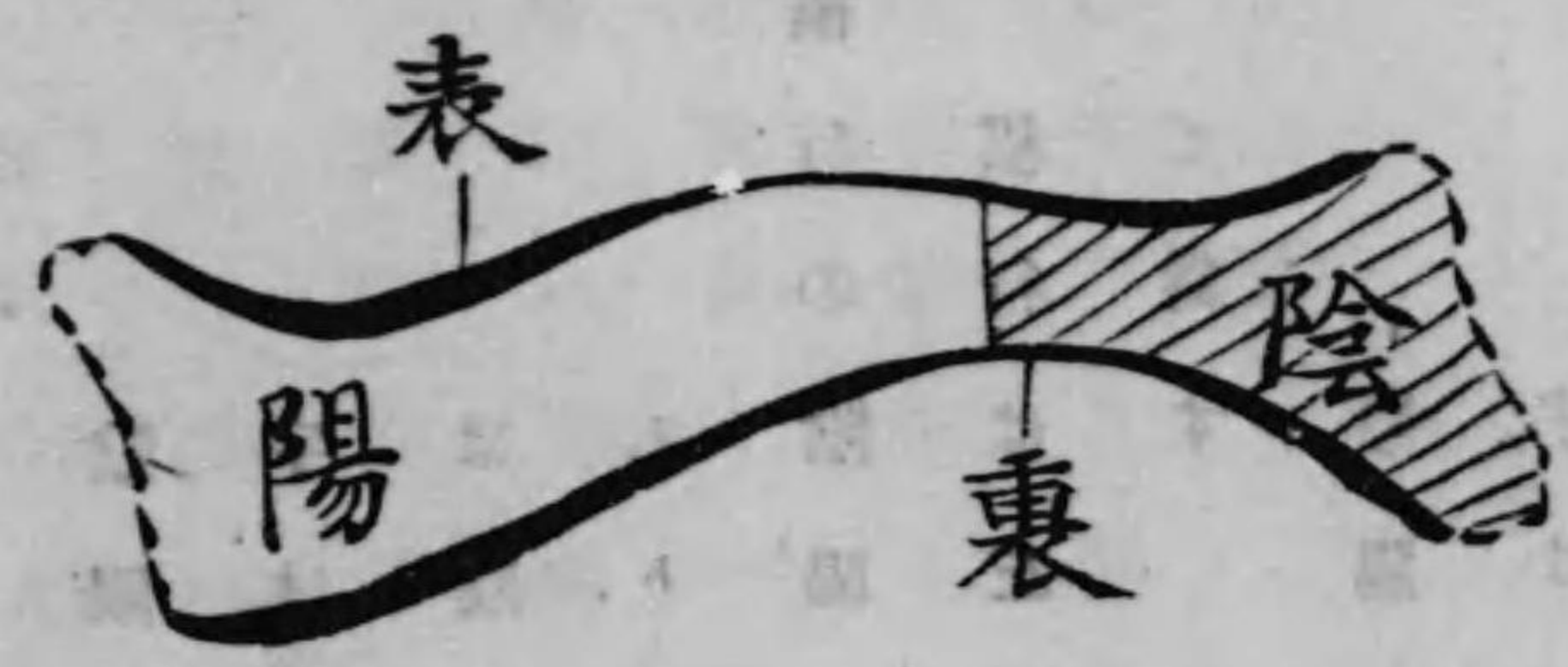
二 横行の陰陽

横行は左方三分の二を陽、右方三分の一を陰と爲す

陰陽の境は其形を最も小にし、右端の一字は稍太く書きて結尾と爲すあり

三 縦行の彎曲

第一



行の縦横を問はず總て直
 線形に配列するを以て行
 の整ひたるものと思は、
 誤解あり。然らば如何に配
 列す可きかといふに、一行
 物は上に示せる一の裏を
 陽を上に爲し、縦に見たる
 形、即ち第二に示せる右側
 の行の如く、陽の中央を陰
 の末端とを右方に出し、陰
 陽の境を僅に左方に出し



たる形を可とす
 次に二行物は第一行は既に説明したる一行物と同
 一ある形と爲し、第二行は第一に示せる一の表、即ち
 第二に示せる左側の行の如く、兩端と中央とを左方
 に出し、兩端と中央との間を右方に彎曲せしむるあ
 り

第三 實例

まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
おんまゝまゝまゝまゝまゝ

次に三行以上の縦物に於ては左に示せる實例の如く中間の行は直線形とあし、右側には二行物の裏、左側には表を用ふるあり

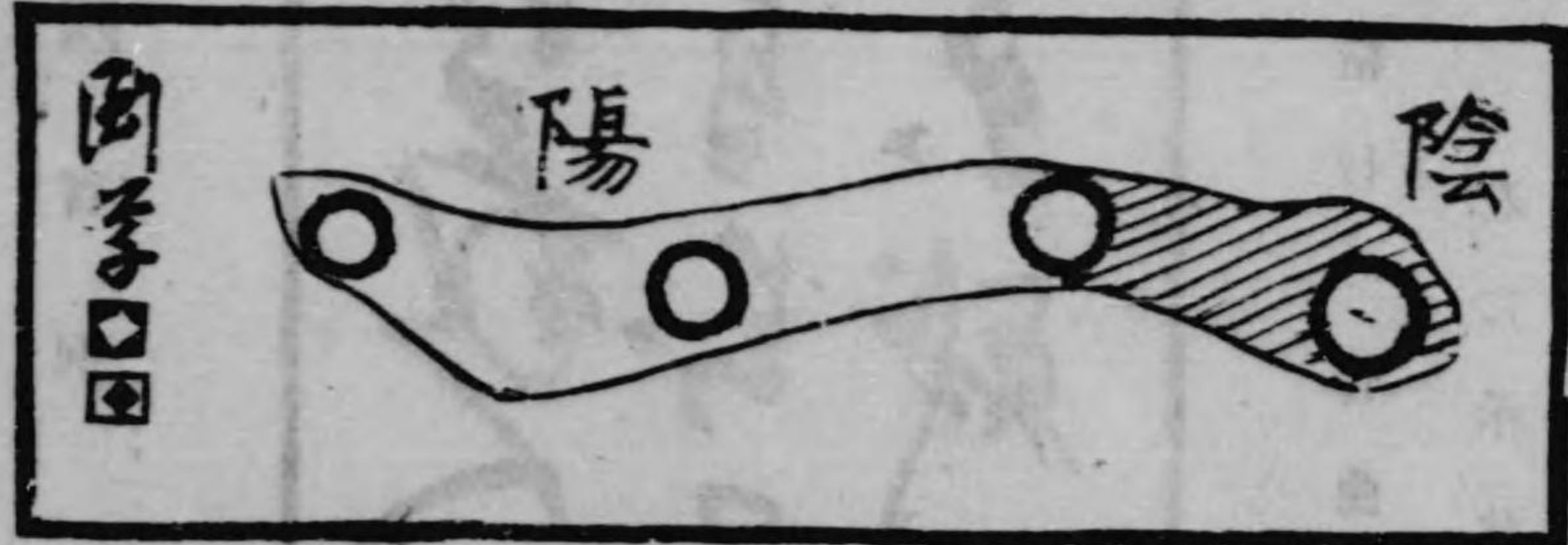
第四 實例

只教人河記村流与
自与五区法本老中
未残海好裡心

四 横行の彎曲

左に示せる如く横行に於ても、筆法の一と同一

第五

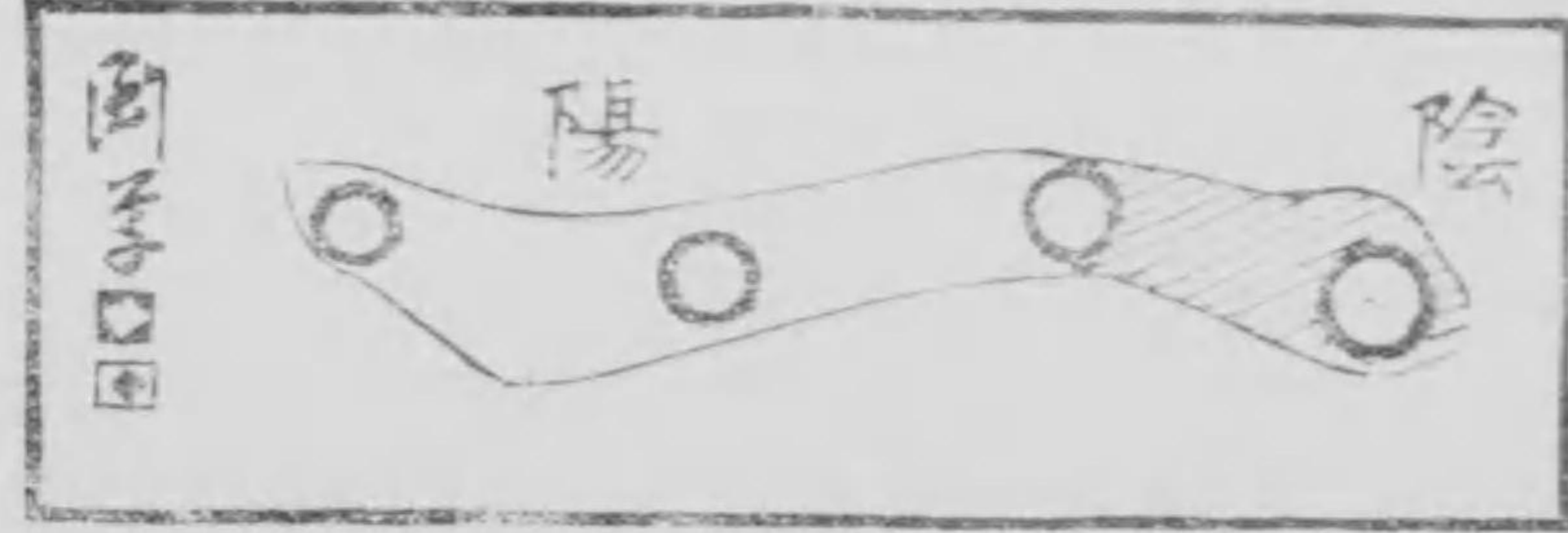


様に、陽の中央部
 と陰の末端とを
 下方に下げ陽陰
 の境を上方に擧
 曲せしむるあり
 次に文字の都合
 に依りては上の
 反對、即ち一を裏
 より見たる形に
 書くことあり
 をはり

110

露光量違いの為重複撮影

第五



様に、陽の中央部
 と陰の木端とを
 下方に下げ陽陰
 の境を上方に押
 曲せしむるなり
 次に文字の都合
 に依りては上
 反対、即ち一を
 より見たる形に
 書くことあり
 をは

内務省御届濟

不許複製

第一版 大正五年二月三日印刷
 第二版 大正六年七月三十日印刷
 第三版 大正六年十二月廿五日印刷

定価金參拾五錢

島根縣邑智郡市山村大字江尾六十一番地

著作兼
發行者

佐々木信次郎

岡山縣小田郡笠岡町大字笠岡二千二十三番地

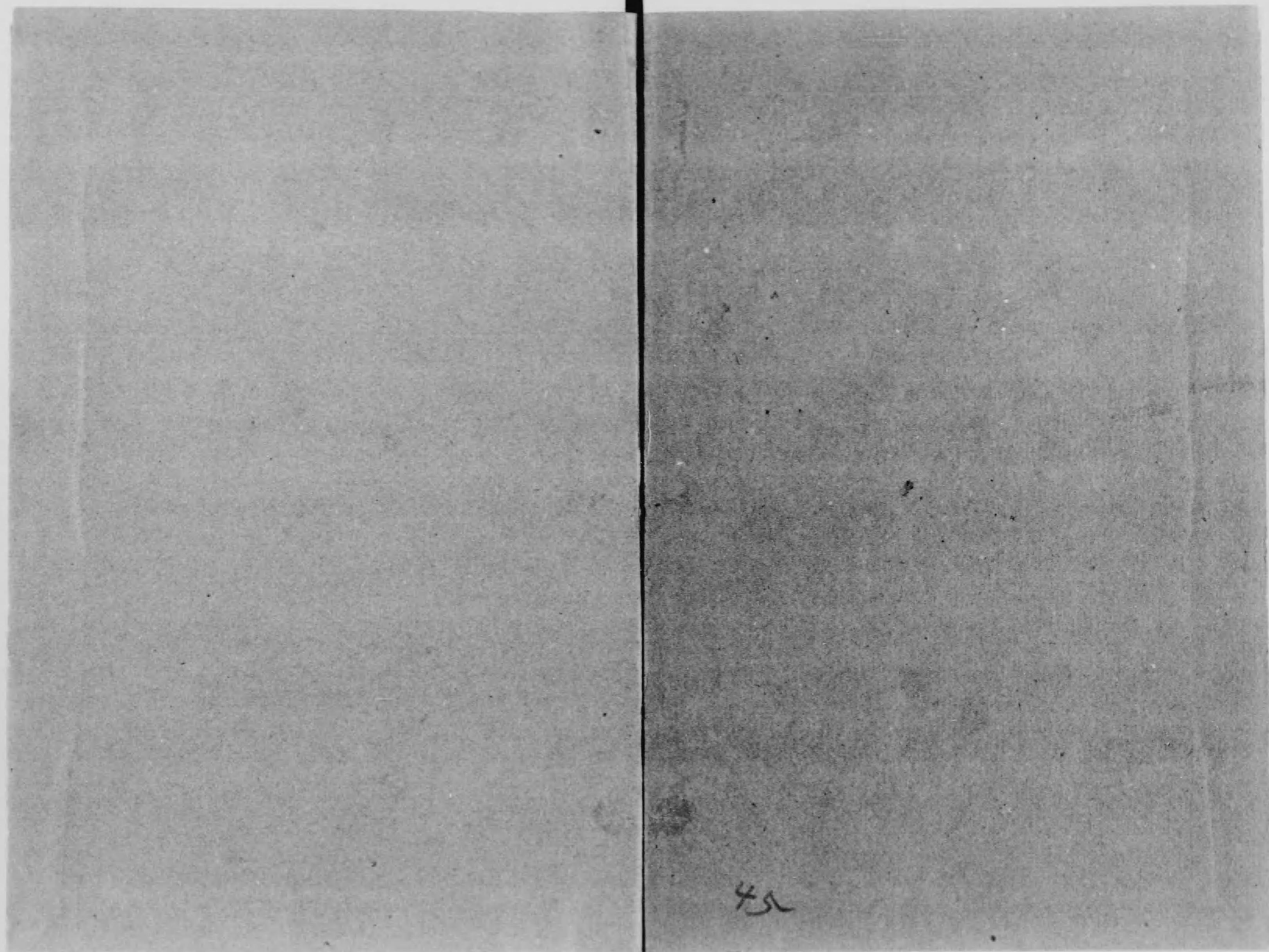
印刷者

時松 勲

岡山縣小田郡笠岡町大字笠岡二千二十三番地

印刷所

三益 合活版所



45

372
41

終